此中にあり　二

此中ふあり

二

胃蟲と顔世花



寛政九年　山東京傳著　百化帖

渉書趣味

舊記

此「渉書趣味」といふのは、予が大阪に於て十年間編輯發行した月刊『滑稽新聞』が、其筋の忌諱に觸れて發行禁止の裁判宣告を受けたので第百七十三號限り廢刊した後、明治四十一年十一月より『大阪滑稽新聞』といふのを二十冊ほど續刊した際、「渉書趣味」といふ欄を設けて續載した記事挿畫の過半を集めたものである

當時低級讀者を標準にして撰拔したものであるから、固より考證もなく理論もなき淺薄の事ばかりではあるが、其中たゞワケなしに面白い事もあるので、全く棄てゝしまふのも惜いと思ひ、此永久的保存の和裝本に收容する事にしたのである、但し挿畫は原本のまゝ木版彫刻であつたものを今回寫眞凸版で縮製したのが多い

紙面の體裁上、行數不足のため外の舊刊雜誌より拔いて塡充したのもある、それには一々末尾に六號字で其題號を記入して置く、その記入のないのは皆『大阪滑稽新聞』の拔載であると知りたまへ

●古い書物の外題

山本權兵衛といふ農民らしい名の海軍大將あり、西園寺公望といふ坊主らしい名の腐敗政黨總裁あり、松方正義といへば實直者らしいが、其本人は官職利用の富を造り、花井お梅といへば優しい女のやうだが、其本人は殺人阿婆摺の毒婦であるなど、名と實との相應しない者は多い

書物にも亦これと同樣、名と實との添はないものが多い、一二の例を擧げれば

戀草　中本三冊　畫者不詳　寛延頃刊

とあるを見ては、軟文學の珍書とでも想像するであらうが其實は草花の畫譜である、又

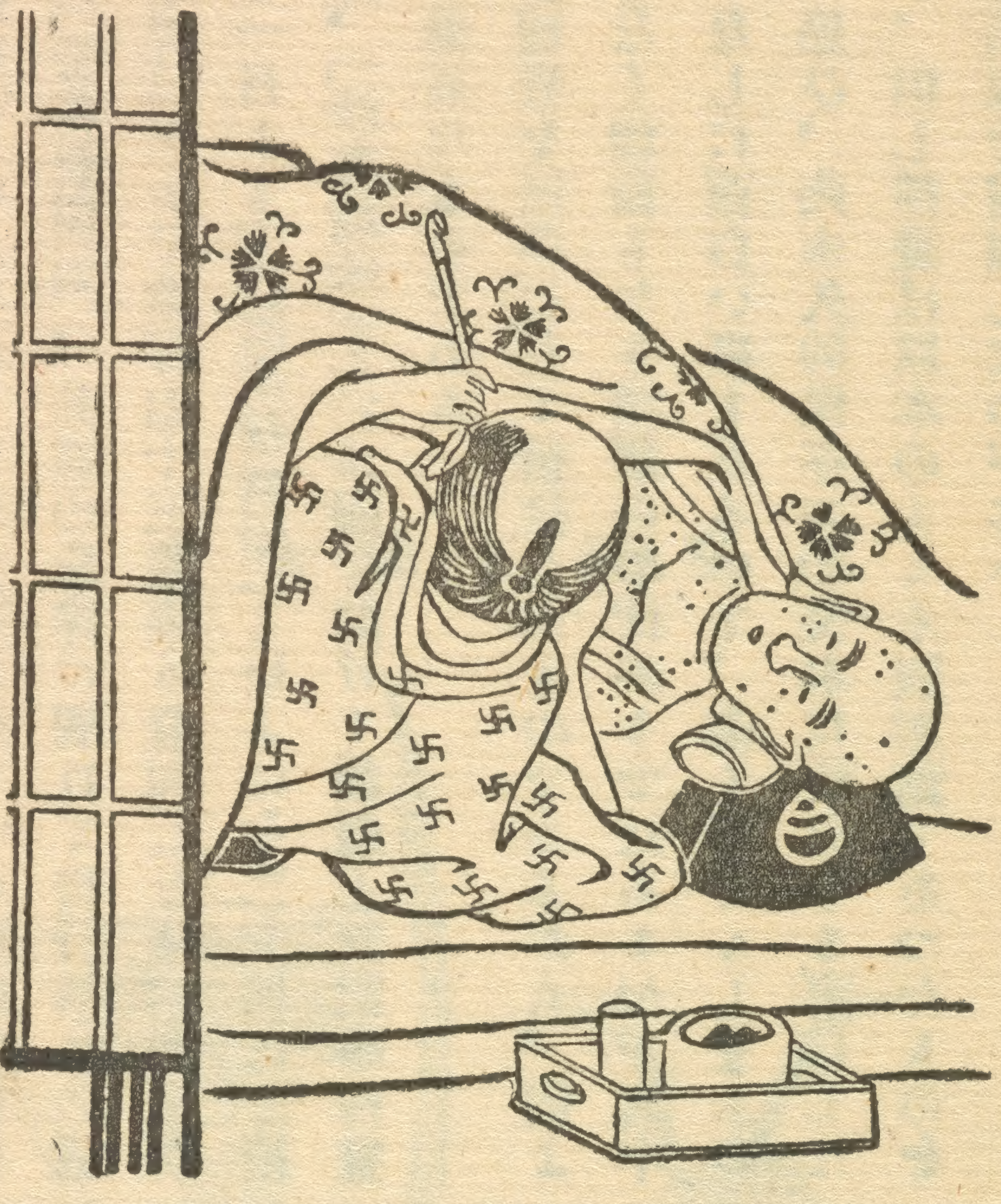
握り拳　大本一冊　著者不詳　寶永六年刊

これは喧嘩物語本の類か、或は當て物賭博類の本とでも想像するであらうが、其實は四十八鷹の圖解である

『覺後禪』といへば宗教哲學の本らしいが、其實は淫書である、『水や空』といへば俳諧句集とでも思ふだらうが、其實は役者の似顔繪である、『奴凧』といふ隨筆本があり、『異素六帖』といふ蒟蒻本があるなど、名前のみによつて其實物を想像すると飛んだ買冠りをやつたり、又飛んだ失態を演ずる事もあるから、宜しく注意すべしだ

●石地藏を抱いて寢る男

此石地藏と同衾して居る繪は『玉磨青砥錢』といふ黃表紙本に出て居る喜多川歌麿の畫である、味氣ない女を形容して石地藏を抱いて寢るやうだといふ洒落を繪にしたものであらう



●お傳といふ女の名

瀬川菊之丞其他數十の男と通じた淫婦「土器お傳の」事を書いてある本を見て「淺妻船のお傳、高橋お傳など、お傳といふ名の女は妖婦淫婦であるらしい、研究して見ては如何だ」と或人が云つた

●須磨琴といふ理由

製作簡單の樂器ではあるが幽靜閑雅の音調ありとて、一部士女の愛玩する一絃琴は、支那にては古來獨絃琴と稱し、我國にては板琴又は須磨琴とも稱して居るが、何故須磨琴と呼ぶかといふに、昔中納言行平朝臣が、播州須磨の浦に謫居の折、海濱に流れて來た卒塔婆を拾ひ取り、冠の紐を絃としてつけ、蘆の根で彈いたのに基くといふ說もあるが恐らくは附會の俗說であらう

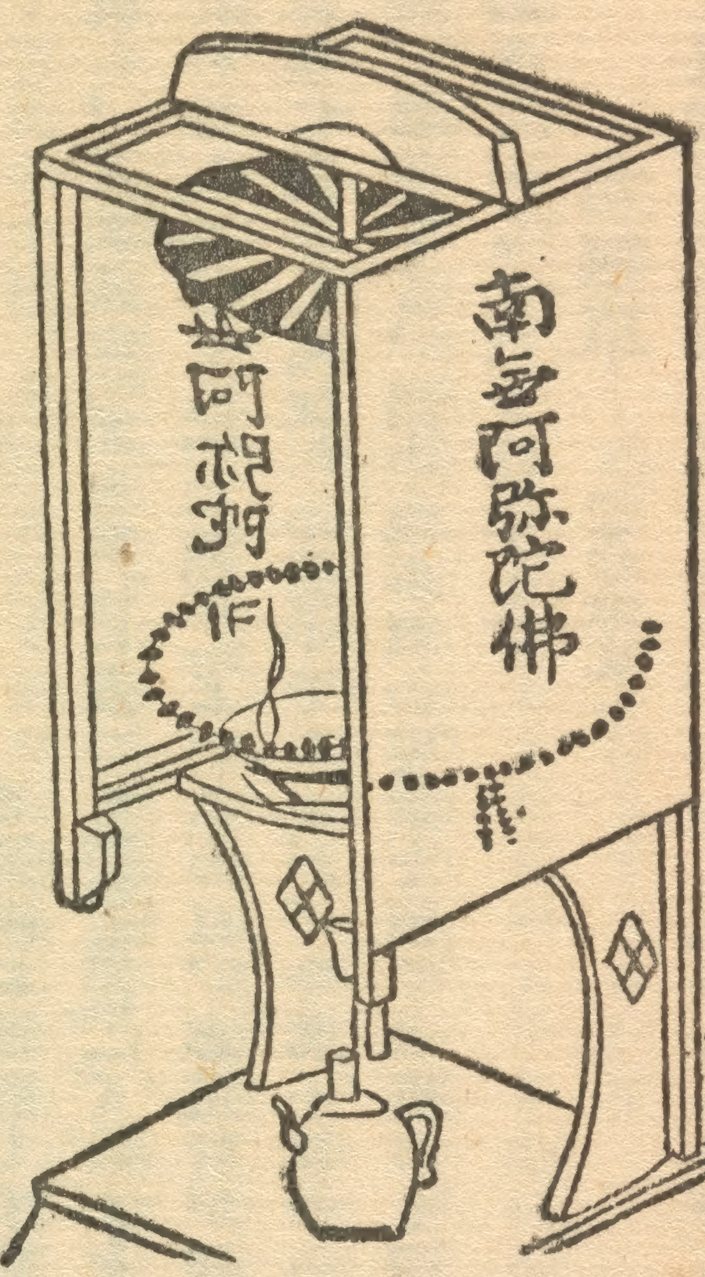
享和三年刊行の『板琴知要』は、一絃琴中興の祖と呼ばれた麥飯眞人覺峰律師の直傳によつて、一絃琴製作の方式、彈法、曲譜等を記したものであるが「曲譜、麥飯眞人の傳ふる所を左に載す、眞人曰く、古來傳ふる所專ら須磨歌詠を用ふ云々」と記して

わくらはにとふ人あらば須磨の浦に
藻鹽たれつゝわぶとこたへよ

淡路島かよふ千鳥のなく聲に
いく夜ねざめの須磨の關守

此二種を先に錄してあるのを見れば、須磨琴の名は、行平朝臣の摸倣製作に基くのではなくて、右の詠歌より起つた名であらうと思はれる

●手間を費さずに百萬遍



明和七年刊行、半田山人の著述で北尾重政の挿畫ある『一心相傳極秘の巻』といふ本に「念佛は不淨を嫌はずとあれば、糞船の中にても南無阿彌陀佛に若くはなし、然れども貧き家には夜も夫々の業ありて暇なきもの故秘傳の法を設く、先づ行燈の四面へ南無阿彌陀佛と書付、中へ紙にて珠數を作りて入、影燈籠の仕掛にて廻すべし、一夜に百萬遍は廻ること妙なり云々」とクダラヌ戲事

●駱駝に人間なみの倫理觀念

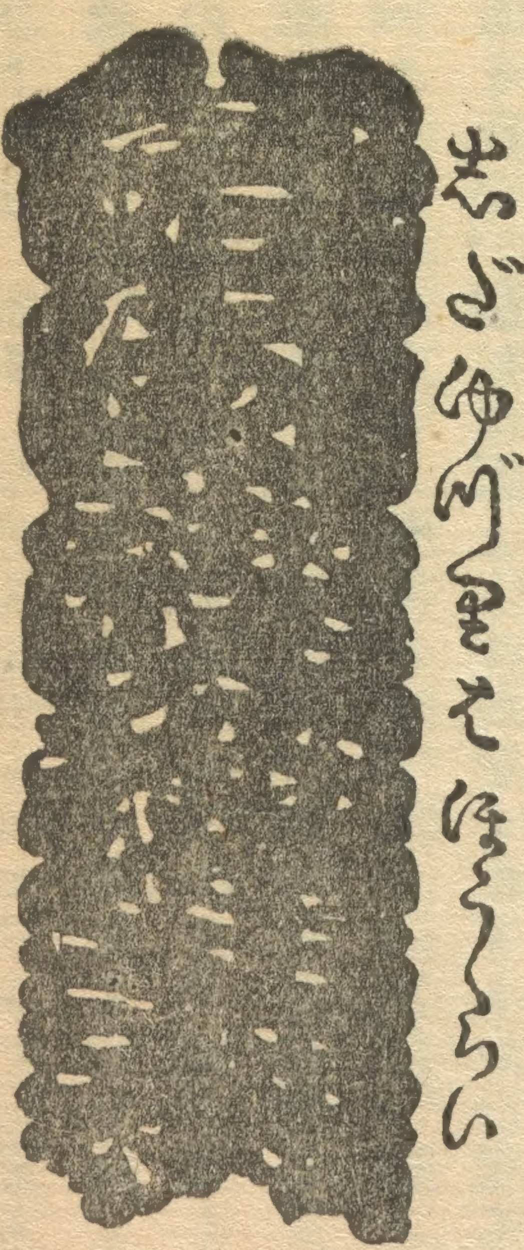
文政七年の刊本『駱駝考』に左の一節があつた

蘭人アリャス曰く、駝は畜類なれども親子交合の恥づべきを知る、昔駝を飼ふ者あり目を掩ひ欺きて母子交はらしめしかば、後に覺りて大に恚り主人を嚙殺したりとぞ

人間なみの倫理觀念ありとは信ぜられない、これは宗教家又は道學者が構造した話でアリャスだらう

○ウニャ〳〵書體勘亭流

芝居の庵看板や相撲の番附などに、チョッと見ては讀み難い肉太の文字を書いてあるが、普通之を勘亭流と稱して居る、勘亭とは文化二年に六十歳で歿した江戸劇場中村座の手代岡崎屋勘六といふ者の雅號であつて、此勘亭が寛文延寶頃に流行した金平本の書體を眞似て劇場の看板を書き初めたといふのであるが、こゝに摸出する外題の如きは其傍訓が附いて居なかつたならば、何といふ字か一向分らない書も亦美術の一種であるから、其體樣に雅趣を具へたのも可いが、徒らに通がつて記號の本性を失つたウニャ〳〵を列べる樣では馬鹿々々しいネ



●志道軒の元無草（珍本）



寳暦明和の昔マラ坊主と渾名された深井志道軒と云ふ辻講釋師は、張扇の代りに木彫の陰莖で机を打いて、大に天下の俗物愚物惡物を罵倒したのである、平賀源内は此志道軒の奇骨と辯説に感服して悟道軒と號し、又其戯作『元無草』に倣つて『根無草』と云ふを著はしたのである、この『元無草』といふのは、志道軒が談義の際群集に配りし瓦版の小冊子であるが、今其小冊子の全文を左に掲載する、語中現俗吏の妄斷を招くの虞ある個所は、殘念ながらこれを缺字とす

元無草　（其全文）

夫天地とは誰がいひはじめけるや、かるく上りおもく下るなどゝ云給ふはなんぞや、おもふに我ら生れて空を見て天といひ下を見て地としる、其中間に品々あるを見習ふて後に天地人といひならはせり、人も草木も始もなく終りもなきものとしり給ふべし、天が天とも名のらず地が地ともいわず草木が草木とも、只自然なり、萬の物是に習ふてしり給ふべし、佛書に世界の始をいふとき光音天下りて人の種となるといひ、儒には天より生民をくだすといひならはせり、愚迷の爲にかくいふなるべし、天とは二人とかく、夫婦和合のとき流れ○る○○、男○の赤き○一厘五毛、女○の白き○一厘、兩○相まぜて二厘五毛なり、一厘は下から上り、一厘五毛は上より下る、上下交代してうごきうめき○○の○○先○○の○○○に○○入るゝ時を都鳥と名づけ○をうごかすをいなおふせ鳥といひ、きん玉の氣血をゝゝゝゝをよぶこ鳥といふ、三鳥の傳といふもみな人の今日なり、然れども學問ははげむべし、世の人鳩に三枝の禮烏に反哺の厚養自然の理をしらず、法は釋迦孔子より始るやうにおもひ、心のかたちをしらず、佛書には心を妙法とせつちし、妙樂大師は心をゑんけんといひ、眞言には心法色形と說き、儒には中庸上天と名づけたり、すべて心のかたちを知らず其心のかたちをしらんとせば萬物のうごく形みな我心の形の動なり、孟子の謂る千變萬化人心の一つ、ま

た古歌に
なることをばおのがつばさにゆるがして
心とさはぐむらすゞめかな
只人は常に心はづかしいといふかるき言葉のふかき心のかたちなり、我三十年來遊民となりき、世の人予が名を呼で○○まら坊といひわらひ草となるを心のたのしみとす、今七十有餘、玉ぐきくつきやうにして○○るなきは萬物造化の大こく天なり、何而(なんで)二はにつこりわらふ形傳授なり、萬物たゝき出す打出の小槌、又はき出すかたち神書に保食の神といふ、俗に○をやるといふ事なり、此時を儒に氣質のうけたる事ひとしき事あたはずといふ、古歌に
白露のおのれが色はそれながら
うくる草木のおのがさまぐ\
田毎の月のごとし、とかく人はあしきとてすつべき物にあらず、澁柿甘干になせば至極うまきものなり、御所柿甘干になせばくらはれぬごとし、善惡二つなし、我が棒は諸道の節を打やぶりかわをむき大元のあじわひを叩き出し諸人の口に膾炙するものなり、かくいへばとていんくわをはらし仁義をやぶりたるにもあらず、經文書籍にこゝろをいたましめ、ひさしくうろたへたるをくやみ今もいにしへもなき元無草と書捨る而已、柳はみどり花は紅、只其儘の色歟その儘の色歟
諸我

讀史軍談數十春　大悲閣下得名新　曾夫木叩牀頭日
白眼總看世上人

とゝんとんとんと大阪關ヶ原
打おさめたる萬世の聲

延享戊辰稔　一無堂　志道草校

家近金龍山上春。春情猶動老顏新。指揮夫木談軍座。白眼一開招幾人。右和戯作家士華

●浮世の味

世智辛いと云ひ、酸いも甘いもと云ひて浮世の味にも種々あるが、生方敏郎氏が京都でお俊傳兵衛の墓を見に行つた記事によると、浮世の味には鹽や蜜などもあるらしい、曰く「動何等の有勳者の墓に詣でる人が無いのに、天下の不孝者たる傳兵衛君足下に線香の煙が絶えぬとは、誠に聞こえぬ話であるが、恁う言ふ不孝者故に、小説も脚本も出來芝居も淨瑠璃も生れるのだ、孝行者が社會を維持する地の鹽であるならば、不孝者は浮世の人を樂ます地の蜜といはねばなるまい、偕々、浮世の味は面白いなあ」（赤）

天女と天狗

亭和元年の刊行、竹塚東子作北尾重政畫『畫飛脚二代羽衣』といふ黄表紙本に、天女が三保の松原で裸體になつて肌着を洗濯して居ると、其油ぎつた白脛を見た天狗は通力を失つて、其邊に落下したといふ事が出て居る

これは無論久米仙の故事を燒直したものであるが、天女に天狗とは其配合が面白い



古今畫家の寄合繪

乘合舟

船頭と船……………葛飾北齋
享和頃刊（隅田川兩岸一覽）

團扇賣……………鍬形蕙齋
文政六年刊（蕙齋略畫）

手洗女……………喜多川歌政
文政頃刊行（繪本五色染）

西洋人……………橋本貞秀
文久二年刊（橫濱開港見聞誌）

六部……………小林永濯
明治十八年刊（吾妻餘波）

坊主……………河鍋曉齋
明治廿五年刊（狂齋百圖）

束髮美人……………木村光次
明治四十二年（大阪時事新報）



●障子に美人を現はす秘傳

手品案内とか秘術全書とか云ふやうな本は元祿前より多く刊行されて居るが、嘉永二年に十方舍一九といふ人が『手妻早傳授』といふ二冊物を著はして居る。十返舍一九は有名な戯作家であるが、十方舍一九とは何人であるか知らない、十字舍三九と號した人が二代目の十返舍一九になつたと云ふ事だから、此十方舍一九も初代十返舍一九の門弟であらう、さて右の『手妻早傳授』第二編に著者自ら序して

紙の蝶飛んで花前に舞、鏡の月は板天井に映ず、豆腐の湯の淡雪積で暑中の興をそゆれば、雷ふすまのあなたに鳴る、空にしられぬ雨の音など、みな這册子の造化にして、わづか一家の小天地に不思議を視せ人の眼玉を驚かし且興せしむること、此一本にまさるものあらんや

と記してあるが、其中の「障子へ人の顔を現はす傳」と云ふのを見ると「おはぐろに明礬を合せて障子に何なりと思はくの顔をかき、よく乾かし置き、さて只今あの障子へ人の顔を現はして御覽に入れますと、水を吹きかくれば右の顔現はるゝなり、びッくりしなさんな、ソリャ出た」と所謂其秘術を書いてあるが、事實はそう旨く出來るものでない、只此繪姿がチョイト面白いから皆さんに紹介します

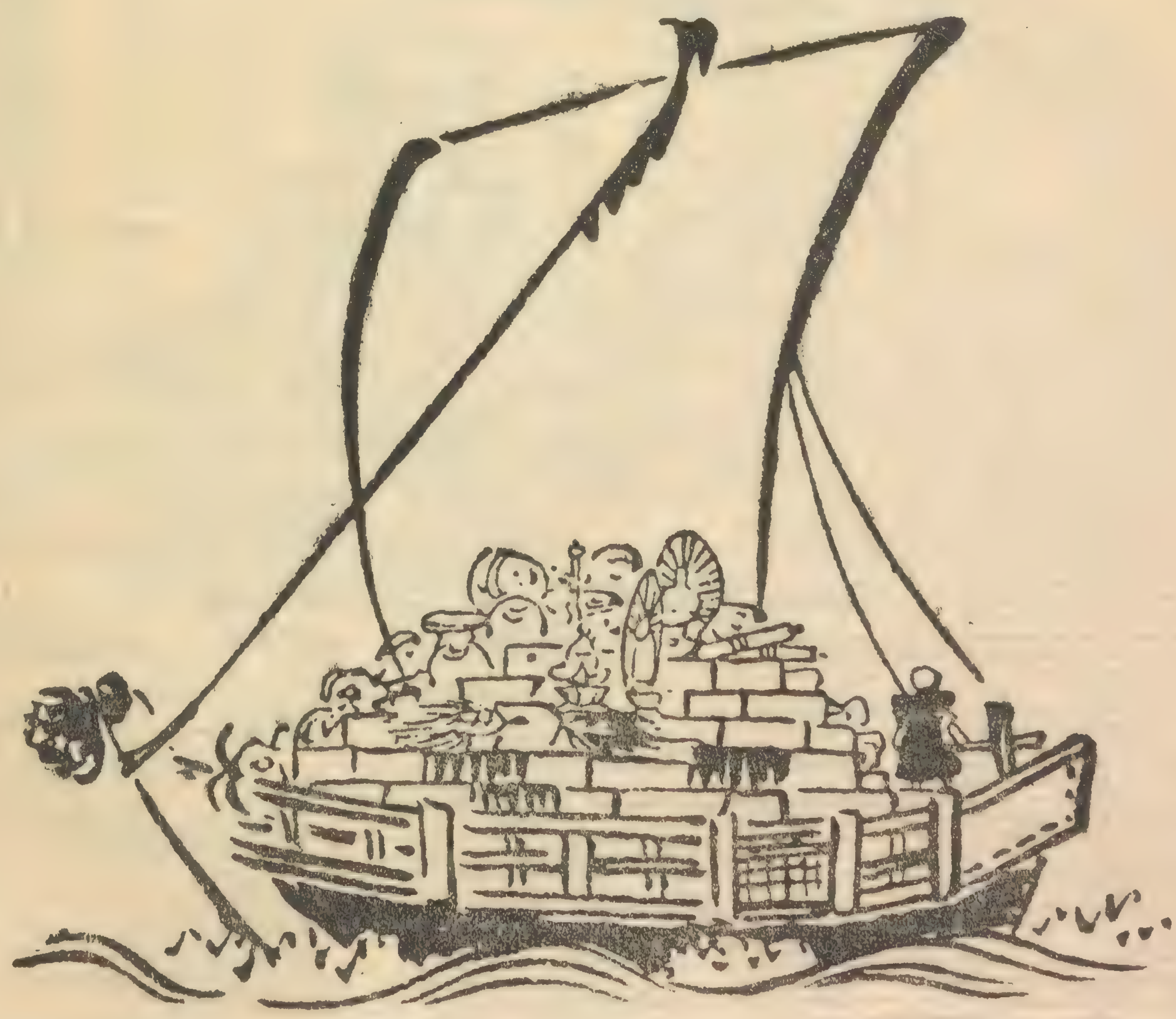


●古本商人の巧言

古本屋が得意先に其古本を賣込むには、イカサマ手段を用ひる事も多いが、又客の氣をそゝる巧妙なことを言ふ者もある、其一例を擧げれば、赤穗四十七士に關する書物を好んで集めて居る人に對して「此元祿武鑑は如何で御座います、赤穗の城主淺野内匠頭の名が是に出て居ります」とか又は「これは元祿十四年の暦で御座います、大石内藏介等が吉良家へ討入つたといふ十二月十四日は此暦に在る日です」などいふので、義士好きの客はツイそれに釣られて「それぢやア買はう」と、高々五錢か十錢の物を一圓も二圓もにツカマサレて喜んで持歸るなどの類である、是等書肆も亦「道によつて賢し」と稱す可きものであらう

●方便としての嘘　寺院の僞寶物

各地の寺院へ行つて寶物を見ると、其十中の一二には必ず弘法大師の御眞筆とか、御自作とか、或は唐土より御將來の品といふ佛像佛器の類がある、又實際寶物といふ品は見ないが、名所鑑とか、名所案内とかいふ本に出て居る寺院の記を讀んで見ると、是亦同じく弘法大師の云々と稱する品が必ず一二はある、我輩は斯の如き記事を見る毎に、其寶物といふ品が若し傳説所記の如く眞物であつたならば、弘法大師が終身執筆と彫刻とに日夜怠らなかつたとしてもマダ勘定が合はず、又唐土より歸朝の際、古道具屋の仕入品よろしくといふ程の諸器物を船に積んで來たとしても、千石や二千石の船には載せ切れないであらうと思ふ



●手洗鬼と龍宮魔

科學の進歩した今日では怪談などを信ずる者もないが、昔はよく行はれたもので、其繪本も多い、之を滑稽文學の一種と見て研究したならば面白からうと思ふ、『繪本怪談揃』



といふ勝川春泉筆畫の本に「讃岐の手洗ひ鬼」と題して此畫が出て居る、三里の間を一跨ぎにする大鬼だといふ怪談で、讃岐には傳はつて居ない虚構の事である

元祿頃刊行の『曾呂里物語』に下の如き挿畫がある、其圖樣が如何にも奇拔突飛であるので、何事かと讀んで見れば、美音で謠曲をやつて居ると龍宮から妖魔が來て其者を拉し



去るといふツマラナイ怪談の挿畫であつた

●江戸本所の「置いてけ堀」

天保頃の刊本『狂歌百物語』中「置いてけ堀」と題する項に

つりためしびくの尻までぬかれしは
　置いてけ堀の河童なるらん



數得てし魚は殘らず置いてけと
　釣師はあごを釣針の鍵

ぬかれたる置いてけ堀に釣魚を
　そこ氣味わるく覗くからびく

などといふ狂歌數首を集めて右の繪を入れてある、此「置いてけ堀」といふのは、江戸本所七不思議の一として傳へられたものである、何故置いてけ堀といふかと聞くに、釣好連が終日釣つて、日沒に歸らうとすると、堀の中から置いてけ〱と連呼する者があつて、必ず其釣つた魚を奪られてしまふといふ怪談によつたのである、固より非科學的の事であるから、今は信ずる者も無からうが、當時眞に其魚を奪られたのであるならば、何物にか盜まれたのであらう此堀今は埋つて其跡なしと聞くが、右の怪談もまた今は埋沒して知る者は尠からう

●大阪椀久の最後

昔延寶の頃、大阪に椀屋久右衛門といふ奇人のあつた事は曲亭馬琴の『蓑笠雨談』にも出てゐるが、蕉門乙州が著にしてある『それ〲草』には、椀久の奇拔な最後談を記してある「難波の椀久は川口に遊び居てあやまりて水の深みへ落入り既に沈み失せんとせしが折ふし螢の心なく飛來るを見て水中より片手をさしのべ是螢よといふ聲を世の限りとして終に底の水屑と失せしとなり」とある、斯樣なノンキで居れば一生何の苦もない安樂であらうが、今の世で斯樣な奇人を見ることは、古い本によつて見るより外にあるまい



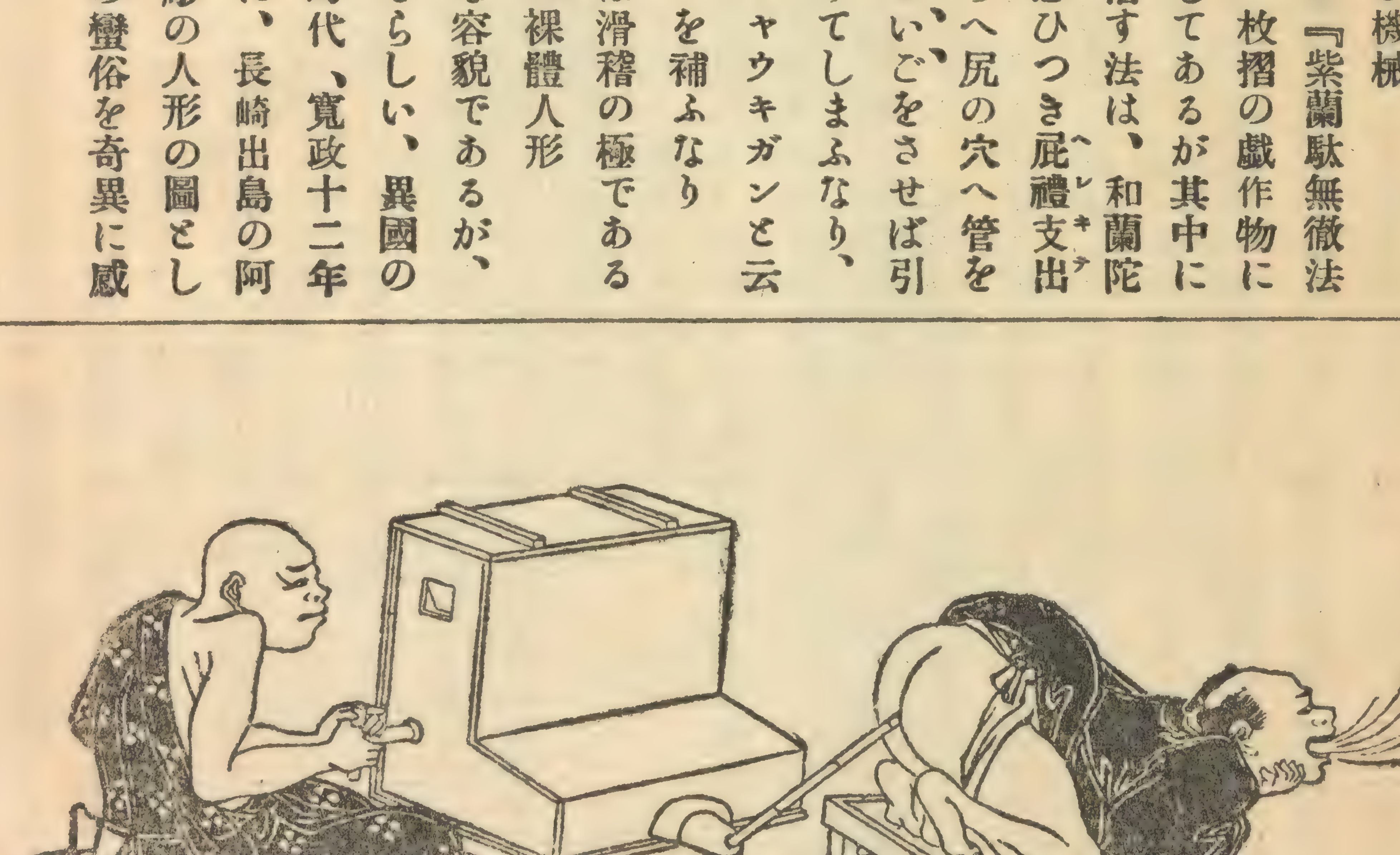
●感冒療治の機械

文政頃の刊行と見える『紫蘭駄無徹法奇轉療治』と題する一枚摺の戯作物に可笑き療法數種を記してあるが其中に風引の病人を直に治す法は、和蘭陀のエレキテルから思ひつき屁禮支出留（へレキテル）といふ鞴（ふいご）をこしらへ尻の穴へ管をはめてさつ〳〵とふいごをさせば引いたる風は口へぬけてしまふなり、其時フクハンキンシヤウキガンと云ふ飯を食はせてあとを補ふなり

駄洒落もこゝ迄ゆけば滑稽の極である

●春夏秋冬の裸體人形

これは日本人のやうな容貌であるが、實は阿蘭陀の姿であるらしい、異國の風俗を珍らしがッた時代、寛政十二年の刊本『長崎見聞錄』に、長崎出島の阿蘭陀屋敷で見た、木彫の人形の圖として載せてある、裸體の蠻俗を奇異に感じたらしい



●刑の大小を知らぬ稗史

山東京傳や喜多川歌麿の著はした繪本には賭博の圖が多くある、座敷の眞中で賭博をやつたり、野中の路傍で賭博をやつたりする樣を描いたものが彼方の本にも此方の本にもある、これは憚らなければならぬと云つて、寛政頃より後には描かぬ事になつたが、それにつき『增補青本年表』に文軒翁の論を記してある

稗史の寓言は勸善懲惡にして、何事をか說き何事をか畫かざらんや、享和以後に敵討の本出てより、卷毎に人を殺し、火を放ち、種々の慘毒の體を極めたり、人を殺し火を放つは刑の大なるものなり、投牌賭博は刑の小なるものなり、後世の稗史、刑の大なるを憚らずして、刑の小なるを憚ること理に違ふと謂ふべき耶

これは正當の議論である

勝川春朗　菱川宗理　葛飾北齋

斯う名前を三つ並べると、知らぬ者は、各々別人と思ふだらうが、これは皆同一人である

北齋と云へば浮世繪の妙手だと、大概の人は知つて居るが、春朗とか宗理とか云つては、專門に研究した人の外は分らぬであらう

北齋は勝川春章の門弟となつて十九歲の時から二十八歲まで勝川春朗と號して居たが、春章に破門されて後は俵屋宗理の名を繼いで菱川宗理と改め、後又獨特の一派を出して寛政十一年、三十九歲の時北齋と改めた其名の異るが如く、その畫風も亦各々異つて居る所に面白味がある



●蟻のとわたり

此一節は予の別著（未刊本の）一節を披載するのである

「蟻の門渡り」とは生理學書に所謂ヱイン「會陰」なり、男女の陰部と肛門との間を云ふ、蟻の通路の如く一道の筋ある狹き場所といふ意なるべし、風來山人の作といへる『道行虱の妹脊筋』の中に「禪谷の片ほとり、肛門寺とて名にしおふ、大師の古跡俯し拜み、蟻のとわたりうち過ぎて、金たの宿にぞ着きにけり」との戯語あり、西鶴の著といへる『色里三所世帶』に「思ひ川にかけて四ッ橋といふは大阪の名所、此邊を蟻の戸わたりと人は言ふなり、南は新町を眺め、うしろは道頓堀に近し、此二つの境なれば其名おかし」とあり、新町は遊女、道頓堀の坂町は蔭間なり古き川柳に「吉原と芳町の間、蟻わたり」といへるに同じ　（逃避文學）四

金鷄　銀鷄　鐵鷄

金銀鐵の三鷄を並べても、これは前のやうな異名同人ではない、これは親と子と孫との三人で、親が金鷄、子が銀鷄、その孫が鐵鷄と號したのである

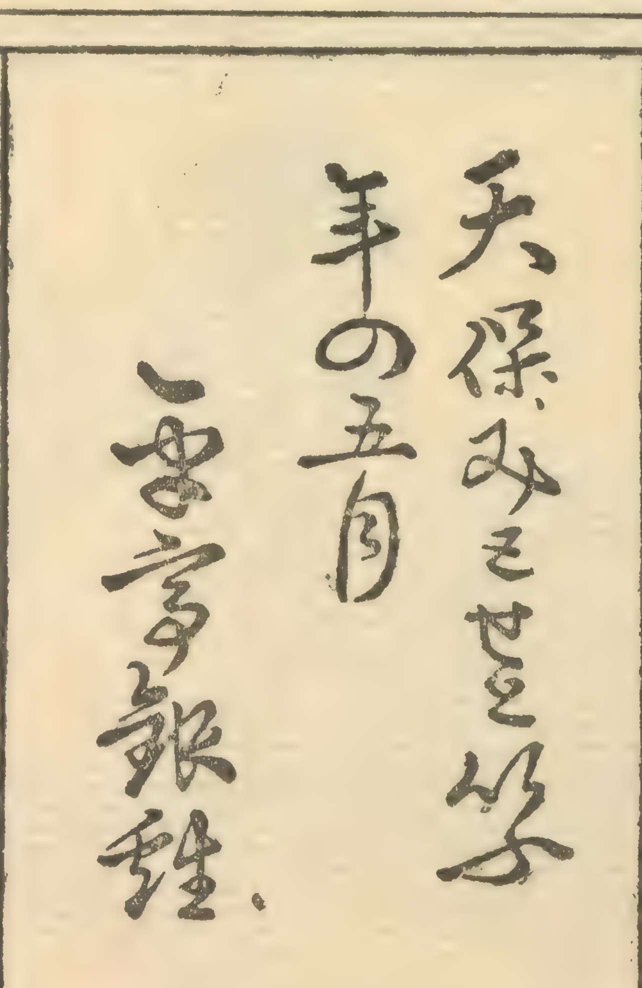
金鷄とは畑道雲といふ醫者である、本業の傍に狂歌や著述をやつて燕石樓金鷄又は奇々羅金鷄と號した

銀鷄は金鷄の子で畑時倚といひ、同く醫者で是亦狂歌狂文や著述などをやつた

鐵鷄は銀鷄の子で畑道意と云ひ、同じく藪醫であつた書もチョイと描いたらしい

此外に、銅鷄、鉛鷄、錫鷄眞鍮鷄、アンチモニー鷄など云ふ子孫があつたか如何かは知らない





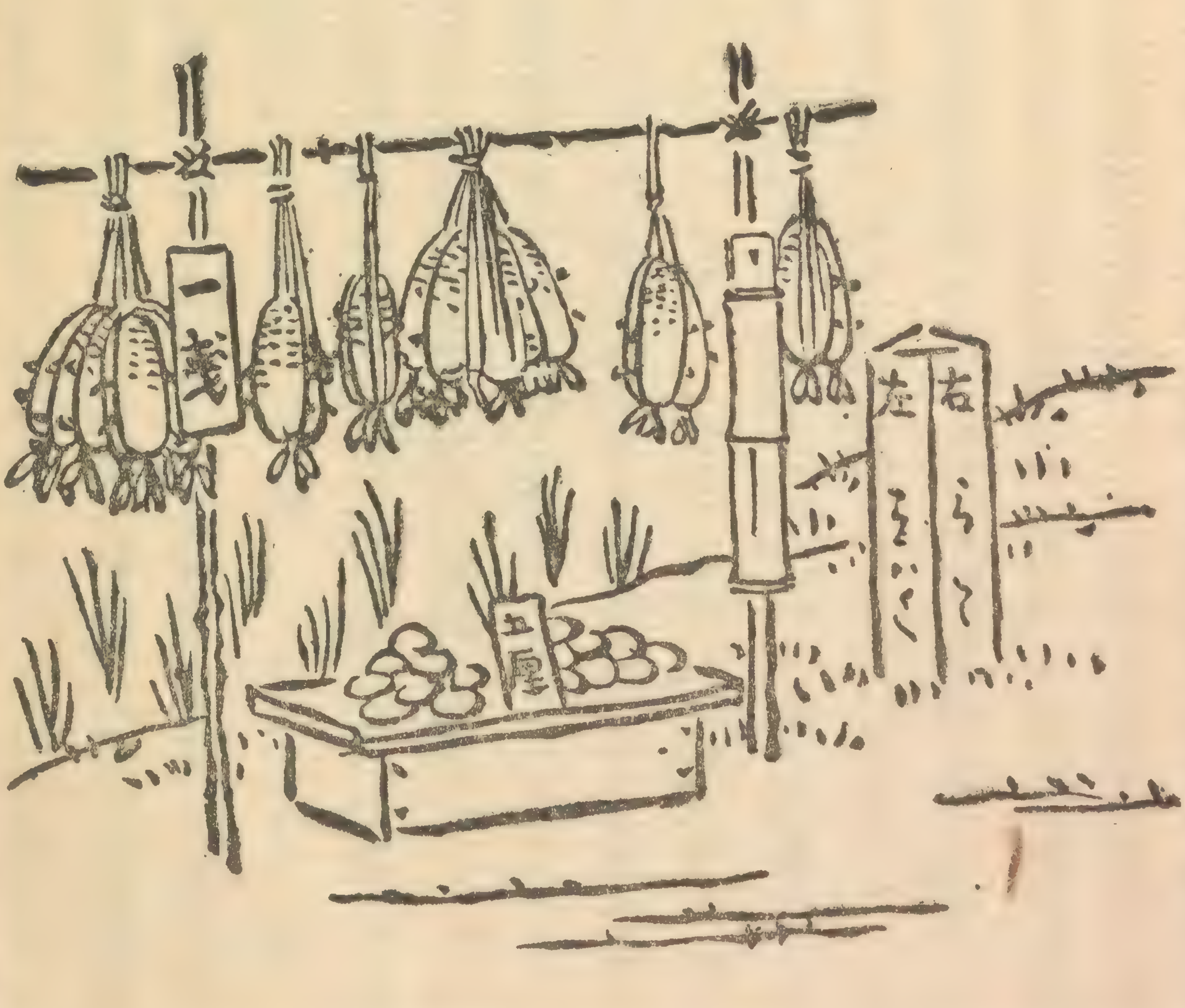


●醇朴の遺風

高知縣の青年篤志家寺石正路氏といへるが著はした『土佐遺聞錄』は初版賣切となつたので、訂正增補して其第二版を發行した、其書中に我輩をして大いに感興を催さしめた一節がある

維新前は醇朴の風ありしもの今は輕薄に流るゝことは、凡そ日本今時の有樣にて、獨り我土佐國のみ然りといふにあらじ、されど當國は交通惡き島國の事とて、流石に新風の入り難く舊習の失せ難きより、自づと古俗の猶忍ばるゝものあるは又床しき心地するなり、先づ些細の事ながら遠山里又は田舍路など往來する時は、人家の稀に物賣る茶店てふもの凡て無き程の所には、道路の側らに鞋、餅、芋、蜜柑など打並べ「つけ木」などいふものに代價を記し、五文ならば五つ、十文ならば十の錢の形を畫き置くなり、又傍らに竹筒を釣り置き錢筒となす、凡そ往來の旅人にて之を買取らんとすれば、程善き品を取り上げ代價付を見て錢を其筒に投じ去るなり、素より番人もなく或は家遠き道邊にては人影稀なれば盜み去らんとすれば盜み得べきも、斯かる仕掛を施して止めざるは然るいたづら爲すもの少なき爲めならん

斯かる風習は予等年少の時近郊の村落にて多く見受けし所なりしが、近頃は縣道國道など云ふもの國中に縱橫して、往來する人も自づと古今相異り、且つ旅行の樣も人



力車或は馬車といふ打扮にて、時勢の移り行きより自然に消へ失する事となれり、但し城下を離れて東西稍遠隔の地に踏入れば、今猶其風習の存するを見る、先づ西は

名野川山中、東は韮生谷、安藝郡の東部海岸など多く其名殘を留めたり、中にも高岡郡の門屋燒坂間の道路の如きは、五歩に一ヶ所十歩に一ヶ所と殆ど其設の頻繁なる所謂人をして應接に遑なからしむる程の事なりとす
凡そ本邦の廣き、東西風俗を異にすること一つに限らずさはあれ斯かる習俗の行はるゝは、我土佐一國を限りとするが如し、明治三十一二年頃隣縣松山中學校の生徒遠足にて當國に來りしことあり、或人其一行に、當國に入りてより何事を珍らしく感じ給ひしやと尋ねしに、其一人は、山中の道路に人も居らず菓子、鞋類を賣り居るには先づ一番の風俗の敦き國柄なりと感じ入りぬとの答ありきとぞ(中略)嗚呼我國にても維新以前の世にては、風俗の敦き古今に類なかりき、何ぞ啻に片田舍の道路に人無くして物を賣るの一瑣事のみならんや、然れども今は物移り世換り、昔時の美風は蕩然地を拂ひ、偶々覺束なき古風の殘りが端なく他國の旅人をして國風の質朴を感ぜしむる材料となりしは、殊勝にも亦意外の事なり
社會が日々に墮落腐敗しつゝある今日、斯る醇厚朴直の美談を聞くは、所謂空谷に於ける跫音の感がある

* * * * *

●桶伏といふ遊女屋の牢

古い川柳に「番頭が來て桶伏の伸びをさせ」「桶伏と入れかへにする座敷牢」といふのがある、蕩樂息子の事を云つたもの、又「桶伏は逆さに振ひ取つた上」とは遊女屋の冷酷を云つたものであるが、これは桶伏が禁止された後の作者が想像しての句であらう、最古の吉原本、寛永十九年版の『あづま物語』に

やかれつゝかねのある程とられんぼ後は必ず桶伏とされ

とあるのは、桶伏當時の状を詠んだものである

●淫婦の目に映せし幻影

貞享三年の刊本井原西鶴の著『好色一代女』は、淫婦一代の經歷を描いたものであるが、其第六卷十二葉目に下の如き挿畫を入れてある、これは其淫婦が多くの男に關係したが爲め、屢々姙娠し、其都度墮胎をした兒の亡魂が、かくの如き姿にて其目前に現はれたといふ物語の挿畫である

一生の間さま〴〵のたはぶれせしを思ひ出して觀念の窓より覗けば、蓮の葉笠を着たるやうなる子供の面影、腰より下は血に染て九十五六程も立並び、聲のあやぎれもなくおはりよ〳〵と泣きぬ、是かや聞傳へし孕女なるべしと氣を留て見しうちに、むごいかゝ樣と銘々に恨申す

にぞ、扨はむかし血荒をせし親なし子かと悲し無事に育て見ば和田の一門より多くてめでたかるべき物をと過し事どもなつかし、暫有つて消へて跡はなかりき

現今の女學生は多くの男に關係し、其姙娠したる際は墮胎の術を施すさうだ、其最も甚だしきに至つては、姙婦預所なる看板を掲げ、內々姙婦の請求を容れて墮胎せしむる事を職業にして居る者もあるそれ等女學生の目には此畫の如き幻影が現はれるであらう



●孔子の「南瓜眞經」

新潟新聞の記者より東京の團々珍聞社に轉じ、後又京都の日出新聞の記者となり、多年美術考古の擔任たりし靜枝金子錦二翁は、去月逝去せられたが、其歿後遺族が賣拂つた紙屑本の中に、明治十五年頃翁が蒐集せしものと見ゆる貼込帖がある、其帖中に『朝野新聞』の雜錄切拔あり、南瓜の豊年と題せる不如笑子といへる人の一文を讀んで見ると、時弊を痛罵して、今年は南瓜の當り年なりと嘲り、尙その末項に

南瓜眞經は彼の孔子の壁中より出でたる書なり其の第一章に曰く、私情に從ふて公道を害する之を南瓜の怪と謂ふ、職權を假りて正義を壓する之を南瓜の妖と謂ふ、佞諛を務めて憲律を枉ぐる之を南瓜の奴と謂ふ、利慾に溺れて氣節を失なふ之を南瓜の鬼と謂ふ、と此の書曾て藏して上野の中堂に在りしが、戊辰の兵燹に燒け失せたり、惜い哉復た見る事を得ず、曰く法螺を吹くを休めよ、天下豈其樣なる書籍有らんや、曰く否否天下既に有るまじき事の續々現出する有り、然らば則ち有るまじき書の曾て有りしも亦知る可からざるに非ずや云々

俗吏を痛罵せし警拔の奇句と云はざるを得ない

●箪笥の中に生鯛

安政二年關東に大地震あり、その翌三年の秋は、江戸に暴風雨の洪水ありて、江戸市街の過半を浸し、財物の被害、男女の溺死等も夥多ありし由、當時の刊本『安政風聞集』全三冊は、その狀況を詳記したものである、悲慘談幸運談等多きが中に左の如き可笑き一節あり



本所割下水邊の或屋敷にて高潮床上へ二尺五六寸上りければ、箪笥浮出て水中へのめりて引出し拔き落されければ、あはて拾ひて水の入りたるをも構はずはめ置き、水落て後、彼の引出しをあけて見るに、貝洲(黑鯛)一匹すくひ込まれ猶刎ねまはりて居たりとぞ、又同じ邊なる屋敷にて家の内を鯡一疋およぎゐたりしが、翌日になり追々水引て後も猶庭のうちに見えたりとぞ、又芝新錢座にては水引て後、家の崩たるを取退ければ烏賊三疋、こち一疋、眞鯛二ひきゐたりと或人かたりけり

●怒りの醫といふ落し咄

落語本は寛永頃の版本『醒睡笑』を鼻祖とし、その後安永天明の頃に至つて最も盛んに刊行され、天保の頃は他の文學と共に墮落して地口調となつたが、古い落語は所謂「考へ落」の妙味を具へて居る、安永五年の刊行『立春噺大集』といふのに

秘藏の梅を隣からわりばさみにて折るを見て旦那大きに腹を立、久三を呼アレ急度しかれ、かしこまつて候とはしごをさし、塀の屋根へあがり見れば、隣から十七八ばかりなる隨分美しき娘が、割ばさみにてかの梅の枝を折る體なれば久三、どの枝がほしいへ

などは、古今變らぬ人情の缺點を穿つたものと、獨笑を禁じ得なかつた

* * * * * * * * *

こんなもの

雑集

『艶道通鑑』に「こんな所がこんなものにや」といふ奇語がある、それを題にして、舊刊雑誌の抜記、面白半分、つむじまがり、裸に虱なし、奇想凡想等にはモレタ雑集、多くは大正十一年の五月以後、半狂堂出版圖書豫約加盟員諸子に頒布した『逃避文學』初號より四號までの抜記である

●廢姓より廢嫡へ

接樹にも花が咲き實が成る、子がなければ養子をすればよい、との意見で、予は明治三十九年五月、大阪の辯護士日野國明子の末女三千代（當時滿一歳）といふを貰つて嗣子とする事にした、爾來愛育十七年間、世間並の學業も終了したので、普通ならば花婿を迎へる筈であるが、予は三年前不圖養子の不合理なる事を覺り、又自分の境遇をも顧み、現養女三千代の身の上をも考へて、予は予一代限りに絶家とし、三千代は他へ嫁せしめた方がよい、「小糠三合あらば入婿に行くな」といへる俚諺の當否は兎に角、餘裕ある財産がなければ良い婿は來ない、否、財産をアテに來る婿に良い婿がある筈なく、貧乏なれば尚更良い婿は來ない、これはイッソ三千代を他家へ嫁にやれば、三千代も幸福、予の一身も係累がなくて一生ノンキかも知れない、と氣付いたのが、廢姓を唱へる内部の一因にもなつたのである、故に廢姓は此廢嫡の伏線と見てもよい

そこで養女三千代の嫁入口を吉野作造先生に御依頼すると先生の門弟で先生の令夫人のお氣に入りである法學士の何某さん、血統品性いひぶんなく、今は大阪の住友に勤めて居られるが、追つては東京へ歸り云々とのお仲人口、それに三千代も惚れ込み、婚約前五六ヶ月間直接交際も試みた上、いよ〳〵結婚となつたのが、昨年の九月五日、瀧の川教會で式を擧げ、上野精養軒で披露の饗宴もあつて、アマイ新家庭を造り、今は早妊娠何ヶ月といふお芽出度い事になつて居るといふので、此親爺までがアテラレて居るやうな仕合である　大正十二年三月（逃避文學）

此仕合せと思つたのは束の間、流産が原因で、大正十三年七月二十二日、二十歳を一期として三千代は腦エンボリーで頓死しました

●賣名的の奇男子

先日、世界巡回歸りの齋藤且力子が、獨逸や佛蘭西の珍土産を持つて來て呉れた折「寸鐵といふ雜誌の四月號を御覽になりましたか」と問ふ故「見ませんが、どうしたのです」と訊ねると「アナタの事が二ヶ所に出て居ます、ヘンテコに評してありました、郵便で送りませうか」、「ハイ送つて下さい」、その後來たのを見ると、一つは「學界の獅子王、植物學者南方熊楠氏」と題した北斗星といふ署名の記事中に

「南方熊楠……彼は全く奇人中の奇人である、ある人物批評家は、物故せる小川定明、宮武外骨、及び彼を拉へ來つて三奇人の稱を與へた、此中、小川は早世し、南方は隱世し、共に世に現はれず、外骨のみ獨り虛名をうつた、蓋し外骨は、意識的ではあるまいが、其一言一行がいつも廣告的なので、遍く世間に知れわたる原因を成したものと思はれる、然るに我が南方氏に至つては、最初から名を賣るを好まない」云々

次は「超凡的な奇博士、獨身主義者の狩野享吉氏」と題した大關和七郎といふ署名の記事中に

「狩野享吉博士……偶ま一訪客、博士に向つて奇問を發した事がある『先生は、こんなに珍書奇籍を集めてゐるので、新刊の雜誌などは御讀みになりますまい』、『あゝ一種類だけ讀んでゐたが、惜しい事に廢刊になつたよ』、『そりや一體何でしたか』、『スコブルと云ふのさ、宮武外骨とか云ふ男は面白いねえ』訪客は啞然として云ふ處を知らなかつたけれど、よく〳〵考へて見ると、奇博士の心胸と奇男子の氣骨と、どこかに共鳴點があつたのかも知れない」

といふのであつた、何と批評されても構はない、先年自ら「賣、名家」と稱した事もある位で、實の伴ふ賣名ならば天下に恥る所はないとの信念を持つて居る者である、次に舊刊『スコブル』の價値如何は知る人の知る所であるが、狩野先生にソレホドの愛顧を受けて居たとは、光榮の至りと云ふ外はない

大正十一年七月　（逃避文學）

●網を破る呑舟の大魚

逃げた魚が大きく見えるのは、あながち慾氣の幻影のみではない、事實大きな魚であるから、網を破つたり、絲を切つたり、鈎を折つたりして逃げるのである、ソレ、いつも官海の大きな魚は、法網を破つて逃げるではないか、これは古今の通則である

（我儘隨筆）

●雄辯家に成る秘訣

誰にても初心の時は、今日は斯々の論を吐かんとて、其前に充分下稽古をなすと雖も、扨演壇に登りて聽衆の顔を見れば、所謂「面くらつて」思ふ十分の一も演べられ得ず、議論も前後して終には聽衆より下りろ〳〵と詈らるゝに至るなり、然れば雄辯家となるには、論旨よりは先づ人馴が肝要なるを以て己れの外に學者なしと氣構へてかゝるべしとは何人も言ふ所なり、然れども斯く傲慢不良の性を養はずして、早く上達するの法あり、そは先づ演壇に登るや否や、目疾く聽衆中の彼方此方にて文盲らしき馬鹿面の者數名を見出し置き、演説中は絶えず其者等の顔のみを見廻し居り、決して他の立派なる人物を見ざる樣にすることそ上策なれと語りし者あり　明治二十八年（頓智と滑稽）

公然の法律違反者







警察犯處罰令第三條第二項に曰く「公衆ノ目ニ觸ルベキ場所ニ於テ袒裼、裸裎シ又ハ臀部股部ヲ露ハシ其ノ他醜態ヲ爲シタル者ハ二十圓以下ノ科料ニ處ス」

力士は此限りにあらずと云ふ法律の條文は無い

刑法第百六十七條に曰く「行使ノ目的ヲ以テ他人ノ印章若クハ署名ヲ僞造シタル者ハ三年以下ノ懲役ニ處ス、僞造シタル印章若クハ署名ヲ使用シタル者亦同ジ

印譜に行使するは此限りにあらずといふ條文は無い

刑法第百八十八條「神祠、佛堂、墓所其他禮拜所ニ對シ公然不敬ノ行爲アリタル者ハ六月以下ノ懲役若クハ禁錮又ハ五十圓以下ノ罰金ニ處ス」

金剛明王に唾紙を投付るは此限りにあらずといふ條文は無い

●上野動物園の馬

昨年七月六日、今から恰度滿一年以前の事である、多摩川の上流、荒川の上流へは魚釣りに行つた事もあるが、マダ坂東太郎たる利根川の上流を知らない、今度東京から澁川迄の直通列車が出る事になつたのを幸ひ、利根川の上流へ行つて見やうと、同日早朝上野を發して澁川に行き、伊香保を左に見て沼田町までの五里間は電車に乘り、沼田町から利根川沿岸を上る小日向迄の六里間は乘合自働車で湯原溫泉に行つた、藤屋といふ同地一等の旅館、內湯もあるといへば立派の樣だが、實はこれでも宿屋かと呆れる程の小汚い家に着したのが、日沒前の六時頃であつた、茶一ぱい呑んで後、早速釣竿を携へて清流に鈎を投じて見たが、一向アタリがない、翌日は更に一里餘上つて見たが、目的のアメノ魚は勿論、雜喉の一尾も釣れない、モー二里ほど上れば越後境であるさうだが、引き返して歸途に就き、大鹿橋といふ絕勝地で、水尋三十餘の淵に臨んだ大巖の上に腰をおろして、前面の鬼斧を眺めつゝ煙草を吹かして居ると道普請をして居た土工が通りかゝつて「旦那、さつきから釣をしておゐでの樣でしたが、何か釣れましたか」と予に言葉をかける、予は「何も釣れないよ、これだけの川に魚が居ない筈はないに、どうして釣れないのか、不思議だよ我輩は年柄年中魚釣りばかりして居る者といつてもよい位の釣好きで、今年の春も荒川の上流、秩父の山奥へ行つて一尺二三寸もあるヤマメ(アメノ魚)を釣つたが、此處にはソンナ魚は居ないのかネー」答「イヤ、居ない事はありません、釣れないのです、其ワケは水電工事の工夫がダイナマイトを投げ込んでヤマメを捕るから、釣鈎にはかゝらないのです、上流へダイナマイトを入れると、其煙硝の香が水に殘るものか、三四里位の下流は二三日間、何も釣れません、此淵などは深いので一本や二本では何の効もないので、先日七本のダイナマイトを一時に投げ込みました、モトがタダですから、惜氣なく使ふのです、それでメリケン粉の大袋に二はい捕つて、二人でエンヤラ〳〵と擔いで歸りましたよ、昨日も此上でやつたらしいのですから、それで釣れないのです」との咄を聞いて呆れもし驚きもしたが予は「ダイナマイトを使ふ事は禁制ぢやないか、無警察同樣の沙汰だ、巡査などは居ないのかネ」

答「巡査は居ますが、ヤカマシク云ふと自分のイノチが危いから、默つて居るのです、巡回の時、左の方でダイナマ

イトを入れて魚を捕つて居ると、右の方へ向いて通るのです」とのこと

こんな所へ魚釣りに來たのは、マヌケの骨頂であるぞと云はぬばかりの口上なので、予は早速其翌朝同地を去つた、工夫は右の如くダイナマイトを私用するのみでなく、時には土民の婦女を强姦する事もあるさうだ、强者の前に法律なしといふ事は、都會地ばかりでなく、山の奥でも行はれて居ると、つく／＼考へさせられた

翌朝早く湯原温泉を去つて沼田町まで下り、同地に一宿して利根川の支流たる小川でアメノ魚の小さいのを三十尾ほど釣つたが、此時川岸より上がつて茶屋で休んで居ると、坂の下で馬車の馬が酷使の勞役に堪へなかつたものか、途上に倒れたのを見た、ヤガテ其馬方が予の休んで居る茶店へ來たから予は馬方に對して「死んだ馬でも二三十圓には賣れるだらう」といふと、馬方は、「死にやうによります、病氣で死んだ馬は、場所によると一圓にもなりません、サー馬が死んだから取りに來て呉れと特殊民に通知をすると取りには來ますが、道程が遠いと三圓とか五圓とかの運賃を呉れと要求されます、金は出せないといへば持つて行かず、さりとて穴を掘つて埋めるのも容易でなく、ヨシ埋めた所が、いつ迄も此所に馬を埋めてあると、人々が氣にしますから、埋めないで三圓五圓の金をやつて引取らせるのです」との話であつた

沼田町から電車で澁川へ下り、同地から東京上野行の汽車に乘つて高崎へ着くと、ドヤ／＼と乘り込んで來た客の中に、予を見知る東京客があつて「ヤー旦那、草鞋がけで何處へいらつしやいました、妙義山にでもお登りでしたか」と訊くから予は「イヤ利根川の上流へ魚釣り遊びに行つたのです」と答へ、それから三時間ほど世間話をして居る間に、予が沼田町で聽いた死んだ馬の事を咄すと、其人がいふには

「上野動物園の馬は、大概宮内省から下がる老馬で、所謂飼ひ殺しの馬が多いのです、其馬が死ぬと、淺草の小林を呼んで引取らせるのですが、死んだ馬は、皮も弱く肉も食へないので、三十圓位の値打しかないのです、それを流石に黑川(動物園技師)は心得たもので、モー此馬はダメだとなると、死にきらないうちに注射をして、直ぐに小林へ知らせるのです、注射をした馬は負傷して死んだとか、屠殺した馬などと同様に、皮も上値であり、肉も馬肉屋へ賣れるので、大概八九十圓位に買ひます、

其上早く電話をかけて呉れたお禮だといつて、小使番にまで五圓位の金を置いて行きます」云々
こゝに委細を云はないが、此話を聽きイヤな感が起つて今に忘れられない　大正十一年七月（逃避文學）

●あたり前ではない

東京の市街電車に乘つて居ると、車掌が「次は室町、三越前でございます」とか「日本橋、白木屋前」とか高聲に叫ぶのを聽いて、イツモ變な感が起るのである、それは三越が室町を獨占して居るのでもなく、日本橋通一丁目は白木屋の店一軒であるのでもない、然るに其店の名のみを叫ぶのは何故であらうか、有名な店とか大きな店だからといふのにしては、あまり偏頗過ぎる、三越の向ひにも白木屋の向ひにも數軒の立派な店がある、降る乘客の十人が九人まで三越なり白木屋へ行くにしても、あとの一人は外の店に用事があつて行くに違ひない、さすれば十度に一度は「何々屋前」と叫ぶのが公平であらうと思ふ、これも富豪制度の一弊であらう　大正十二年五月（逃避文學）
但し三越や白木屋は、電氣局へ毎年叫んで貰ふ料金を拂つて居るのであると聞いたが、其眞僞は知らない

●紙を徒費する雜誌

社會的にも個人的にも事物の徒勞徒費といふことは多くあるが、近世紙の徒費ほど甚だしい物はあるまいと思ふ、俗物相手の『講談倶樂部』といふ月刊雜誌などは、昨年の不景氣には、十五萬部印刷して八萬部位しか賣れず、殘りの七萬部は、月遲れ物として安賣りすると、其古物ばかりを買ふ者が多くなり、新刊物が賣れ少なになるからとて、一切ゾツキ屋の手に渡さず、潰しとして表紙を剝がし、それを製紙會社へ賣つて居るので、いつも綾瀨川へ魚釣りに行く途中、北千住の堤上邊で、大八車五六臺に古雜誌を山積みにした物を見ると、皆講談社の潰し雜誌である、態々費用をかけて印刷した物を人にも見せず、ヤミに葬り去るのであるが、此『講談倶樂部』だけの紙の徒費でも少からぬ事である、それから日々各地で發行する新聞雜誌のムダ物も多いのであるから、之を合算したならば其の紙の徒費量が夥しい額であらう、それから全くのムダ物ではないが、日々戸々に配達する新聞紙でも、讀む個所は八頁十頁の中で一頁位の平均で、殘り七頁なり八頁なりは、全く紙の徒費なりとして見れば、其總量は莫大なものであらう　同上

●如露亦如電書

多々羅義隆の辭世に斯ういふ道歌がある

討つ人も討たるゝ人も諸共に
如露亦如電應作如是觀

此下の句は佛典の金剛經に『世間有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀』とあるのを引用したもので、人生の無常を説いた語であるが、此語に就て面白い話がある犬塚勝太郎といふ人が大阪府知事として來任した時、所謂人氣取の一策として、學者文人連を其の官邸に招待して談話會を開いた事があつた、(其時予も誘はれたが行く氣にならなかつた) 其折柄來阪中の大槻如電翁は予の住宅に宿泊されて居たが、翁も右の會に招かれて出席した、其翌日か翌々日に翁は、「我輩も書家になつたよ、先夜犬塚知事の官邸で揮毫を賴まれたのや、北の新地での註文が多いから今日は一日書きなぐるつもりだ、女中さんにでも墨を磨らせて貰ひたい」と云ふ、さらばと毛布を敷き筆や硯を出すと翁は絹本やら白紙やら扇子やらを展べて縱横に揮灑しつゝある所へ、八字髯の洋服男が來て、「拙者は知事官邸の者でございますが、知事から大槻先生に御願ひをしてある御揮



毫物を頂戴に出ました」と云ふ、それなれば此方へと、其男を同じ座數へ通すと、彼は更に又扇子五六本を出して、これへも御序でに願ひたいと云ふ、大槻翁「よし〳〵」と應へて筆を執られる折、予は大槻翁に「私にも一つ書いて下さい」と請求すると、翁「何を書かうか」予「望みがあります」翁「何とだ」予「如露亦と太く書いて、其次に如電書と細く書いて下さい」翁はそれもよし〳〵とて洋服男が持つて來た扇子に書いて呉れた、予は其扇面を見ながら「これは妙、天下無類の珍です、今朝來ゴヂャ〳〵と澤山書かれたが、いづれも平凡月並の語句ばかりぢや、此「如露亦如電書」は一字千金の價値充分です」と嬉し氣に褒めころばすと、洋服男は欲氣を出して「その扇子は拙者持參の物でございます、それは拙者の方へ頂戴いたしたい」と云ふ、予は之を聞いて「然らば扇子の代價を仕拂ひますから、此扇子は此方へお譲り下さい」洋服男「イャ御譲りは出來ませぬ、貴方は御勝手に別の扇子をお買入れになつて、大槻先生に御頼みになつたら宜しいでございませう」と云つて承知しない、犬塚の使ひに來た一小俗吏、揮毫料を拂ふでもない奴が、他人の宅へやつて來て、遠慮も愛想もない强情を云ふから、予は憤然として「同じ物が二つあつては面白くない、如露亦如電書の妙案は我輩の創意である、此通りの扇子を買つて貴殿に返します、それもイヤと云ふのなら此扇子を此處で破り棄て下さい」と怒鳴りつゝ大槻翁に向ひ「大槻さん、此通りの文句を此外で書いてはイケマセンよ、これは我輩の新案だから」と飽迄も我意を張ると、サスガの洋服男も予の權幕に恐れたのか「さやうならば其扇子は貴殿に呈上いたします」と云つて頭を下げる、大槻翁笑ひながら「遂々モギあげたナー」と云ふ、其時の扇子が即ち此寫眞繪である　大正二年十二月　月刊雜誌(不二)

●舊想尙齒の壽算

「人壽の長短は歲月を以て論ずべからず」と共に「人體の老幼も歲月を以て算す可らず」である、世間には三四十歲にしてハャ老耄する者あり、六七十歲となるも、尙勇壯矍鑠たるものがあるではないか、故に國家として尊敬すべき人物は、其年齡にあらずして其功勳にあること論ずる迄もない、然るに只歲月のみを主として年齡を調査し、其最高老者に對して、特別の待遇を與へんとするが如きは、舊想に囚はれたる僻事の一たるを免れない、衣桁食囊の馬齡者國家は寧ろ其存在を呪ふべしである、尙齒笑止（我儘隨筆）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

●逆境と性格

自己の軟化についての感想、神經質の天性をブチアケ

僞基督敎信者か否か萬年社主高木貞衞氏

順境の君子が逆境の小人に化する前例は多々あつて珍らしくないが、玆に關西第一の新聞廣告取次業萬年社の社主高木貞衞といふ人がある、此人は往年詐欺廣告の罪科で入獄中、正念發起して基督敎信者となり、爾來其自己を持すること最も堅く、萬事該敎のオキテに從ひ、十戒遵守は勿論日曜日の休みを勵行し、又自己が飲酒を禁ずるのみでなく其營業とする所に就ても「本社の社主は基督敎信者でありますから、酒の廣告は一切取次ぎませぬ」と云はせて、事實それを斷行して居たが、近年に於ける社會一般の不景氣は、此業者にも波及し、其廣告取次數の漸次減少を見るに至つたので、昨今は競爭入札までをもやつて酒の廣告を取次ぐやうになつたと云ふ事を聞いた、衣食足つて榮辱を知るとやら、生活上の經濟問題といふ難事が、其人の德性をも損ずるに至るのであるが、或は僞善のバケの皮が剝げたのであるか、其何方にしても逆境者の注意すべき一事である、又若しこれが經濟上の關係問題でなく、其信敎上に於ける頑强の非を悟つた結果であるとしても、予の意見では其多年の主張を枉げた一事は、高木氏平常の性格を毀けること大なるものと信ずるのである

南海電車と阪堺電車、愛に惹かれた親心

逆境が德性を損すると云ふのでなく、社會の或事情が人の德性を强制暴壓する事もあると思ふ、其一例として云ひたいのは、予が濱寺公園內に住居してゐた際、大阪市內へ往復するには、南海電車よりも阪堺電車の方の距離が近く、(半分)便利であるに拘らず

阪堺電車は政友會の橫暴で成立した破廉恥會社であるからアレには乘らぬ

家族にもアレには乘るなと命令するのみでなく、阪堺電車に乘つて來る訪問客には面會しない、と云ふ程の極端排斥を唱へて居たが、濱寺小學校へ通學する予の一人娘が「南海電車の諏訪の森驛から下りて行くのは遠くて、時には遲刻する事もあつて困ります、阪堺電車は學校の前に船尾驛と云ふのを設けてあるので往復の昇降とも便利ですから阪堺電車に乘らせて下さい」と要求するのを聽入れないで、「それなら步いて行け」と叱つて居たが、病妻からの嘆願もあり、雨の降る日、風の吹く日などの困難も察せられ、

又自己が政友會の横暴を嫌ふがために、幼兒の便宜を强壓するのはアマリ酷らしいと云ふ軟化の意見も出て、終に阪堺電車に乘つて通學する事を許したが、自己や家族は依然南海電車のみであつて阪堺電車には乘らなかつた

良心に背く軟化、其罰の苛責

其後天下茶屋の聖天山南に移轉して見ると、又も南海電車の方が遠く、阪堺電車の方が近くて昇降に便利なのみでなく、大阪市内の東方東南東北方面へ行くにも阪堺電車の惠美須驛の昇降が便利であるがため、家族や雇人等は予の命令に服從しないで阪堺電車に乘る

「交通機關は人々の往復に便宜を與へるやう出來て居るのであるから、其便宜に隨ふ方が文明人の常道です、若し東海道線が政友會の設計であつたならば、アナタは東京へ行くのに、神戸から汽船に乘つて横濱まで行き、横濱から東京まで歩くのですか」

と云ふやうな家人の反對說もあり、又來訪客の八九分までが阪堺電車で來るので、自己も亦終に其便宜に隨ふ事になつて、其後は阪堺電車に乘つて居る、乘つては居るが、

「アンナニ强硬排斥を唱へた宮武が、今は阪堺電車に乘つて居る」

と誹られはしないかと、良心の咎めは止まないで、いつも車中に予を知る人は居ないかと恐る〳〵見廻して、其一人も居ないのを見て初めて安心する事である

予の排斥意見が元來誤謬であつたのか否かは知らないとしても、此一事は高木氏の酒廣告と同樣、予の性格を毀けること大なるものと信じて居る、故に逆境のみが人の德性を損するのでは無いと云ふ實例であらうか

否々の結論、衣食足つて仁義成る

如上の理窟を云つて見たが、又飜つて考へると、これもヤハリ生活狀態に關係した結果だと思ふ、何故となれば、富裕の身であるならば、嫌ひな阪堺電車に乘らないで、立派な自動車を拵へて大阪へ往復するか、又は自用車夫數名を置いて自己始め家族雇人等をも南海電車の停留場へ送迎せしめて「阪堺電車は嫌ひだから一切乘らない」と威張つても居られるからである（其馬鹿贅澤の奴といふ非難は別としての論）

されば倉廩實ちて禮節を知るの類で、節義節操と云ふ堅い心も、或場合には生活問題のために軟化する事もあるもので、順境の君子が逆境の小人に化するのも、畢竟は生活問題に關係する結果である、斯う考へると世の變節漢にも幾

分同情すべき點がある

此後間もなく阪堺電車は南海鐵道會社に買收されて合併したので安心した　　大正四年一月（天下茶屋）

序でに附記して置く、萬年社長高木貞衛の事が、明治十七年一月二十日發行の『東京繪入新聞』に左の如く出て居るのを發見した、此破恥罪で刑を受けた者であらう

去年十二月の中旬ごろの事だが大阪株式取引所にて豫て堂島の人濱崎何某より預りおきたる身元金二千圓（起業公債證書にて五百圓二枚百圓十枚なり）紛失したるが一體株金身元金などは備へつけの弗箱に納めありて容易に盜まるべき物ならぬに如何にして紛失したるかといふに鍵預りなる岸本源四郎といへる人が舊臘右の弗箱を開き出納をなすことありし半途にふと便所へ行き程なく歸りて見るに別に異なることもなければ其儘締りをなしたるに三四日を歷て再び中を改めしに濱崎より預りの公債證書の紛失したれば岸本はいたく驚き種々穿鑿の手を盡しゝ末其筋へも訴へ出しに心齋橋通りの判木屋にて二または八などいふ小き判を誂へしを不審なものと或人が見認しより探偵になり終に三十一日に東區警察署へ拘引されしは彼取引所の役員にて高木貞衛（二十七）といふ者なるが嚴しき調べに包みあへず申立し其筋は右の證書を竊かにとりてもとの番號を削りし跡へ彫せし數字の印をおし南區清水町の兩替商何某かたへ千圓だけ抵當にして三百圓借入れはしたれどもおのが名前は包み置き我妹聟のつとめある岩佐幸三郎の名にせしとまで事明白になりしかば五六日前松屋町の監獄署へ送られしとぞ

もと此高木貞衛といふは大東日報社の社員にて一昨年朝鮮の事件中探訪のため下の關へ住替に出て稼ぎゐたる常子といふに馴染をかさね今はこれを妻となし同社を退きし其後に此取引所の役員となり何不足なき身分にて六十有餘の母もあるに何とて斯ることをせしか實に淺ましき次第であると同地よりの報知のまゝ

高木貞衛は近年も議員瀆職罪でやられたと聞く

●無姓様　　廢性はイヤ

予は昔から一枚の年賀狀をも出さない、それには大した理由があるのでもない、要はブシャウ者の本性と見ればよいだが、新年に各方面から來る年賀狀、繪葉書は興味を以て歡迎して居る、今年も三百通ほど來たが、試みに宛名を類別して見ると、マダ廢姓の唱道を知らない人も多く、又知つて居ても、本名ばかり書くのは何だかヘンだといふ舊慣

に囚はれた人が多いので、「宮武外骨」樣とか先生とか書いたのが三分の一以上あつた、その外は

半狂堂外骨　　外骨
(宮武)外骨　　廢姓外骨
無姓外骨　　舊姓宮武外骨

無姓はフルツテキル、昔長尾無名といふ名の人があつた、予が若し無名と改名すれば「無姓無名」となつて面白からうなど思つた、それから單に「廢姓樣」とのみ書いた神奈川發のハガキが來たので、名は無くてもよいやうだと思つた、次にイヤな感が起つたのは「廢姓」を「廢性」と誤記したものである、それが五六通あつた、性理だの性相だのいふ性は支那で心理の義に使用され、日本でも同義に使用されて居たが、近來性慾學が盛んになつて以來は、單に「性」といふ字を性慾の義に使用する事になつたので、「廢性」といへば性慾を廢した義になる、今年五十七歳ではあるが、マダ性慾を廢しては居ない、老て倍々壯なりといふ語はあるが、予はマダ老たりではなく、壯なりでもなく、若者ナミである、それ故間違ひでも「廢性」の字には、少からぬムカツキが起る、以後は御注意ありたしと申上げて置く

大正十二年三月　(逃避文學)

●三代目の賣家

何人もよく知つて居る古い川柳に「賣家と唐樣で書く三代目」といふのがある、これは解説する迄もない意義明瞭の句であり、又事實を穿つた名句として傳唱されて居るのであるが、何故三代目が家を賣るかと考へて見たが、これは心理上必至の事であらうと思ふ

先づ親が義理人情をも顧みず勤儉力行で財産を貯蓄し、子は其親に訓戒されつゝ成長して、兎も角一家を持續するが孫は祖父母の苦心を間接に聽くのみで、訓誡も受繼ぎ訓戒に過ぎないからアマリ身にしまず、家が富裕なため教養を充分に受けても、情慾が勃發して遊蕩に耽る事に成るのである、これは親が一生ウマイ物をも食はず、遊びたい時にも遊ばず、子も亦直接教訓によつて一生を抑制で終るのであるが、さて三代目に至ると、其抑制が仕切れなくなつて親と子と孫自身との三人分が一時に勃發するから、後も先も顧みないダヾラ遊びに陷るのである、又三代目までも續かず、二代目で潰れるのも少くないが、それは親が最もヒドイ吝嗇で貯蓄した者に限るやうである、故に情慾抑制も程度を過ぎると、子孫に害を殘すのみで、社會の爲めにもよくない

大正十二年五月　(逃避文學)

大睪丸の話

何のためと云ふワケもなく、只珍らしい大睪丸の話を集めて居たのを玆に列記する妄語怪談らしい事もあるが、敢て取捨もせず、原文のまゝに抜記したのである

●睪丸の大なる神

明治三十九年發行加藤三吾著『琉球之研究』中巻所載

知念間切安座眞村に大神宮といふ祠堂あつて、古袈裟と珠子と香爐とを寶物として保存し、毎年舊四月十八日に祭を行ふことになつてをる、其由來は

むかし一僧あり、那覇に漂着し何れの人なるを知らす、自ら稱して大神宮といふ、身長一丈にあまり大力無双加ふるに大睪丸なり、常に紐を以て睪丸を吊るし之を頸にかけて市中を徘徊す、人怪んで(キンマンムン)と呼びたり、其後安座眞村に來り住し一百二十歳にして死す、葬後三日木棺を開て之を視るに、只木葉のみあつて屍を見す、村人以て神仙となし祠を建て之を祭る、大神宮一人の子あり、親獄といふ、身長力大頗る父に似て而も亦大睪丸なり、馬に乘るに當り常に踏臺を用ひたりとて祠前に一石尚ほ存せり、嘗て尚德王に從て鬼界島を征し、偉功を建て與那覇村を領す、尚德變死の後逃れて行く所を知らす、或は云ふ、遠くヤンバルに隱れ節を守て身を終ふと

(編者曰)『琉球國事略』には左の如く記してある、同じ神話であらう

睪丸の大きな神樣といふ傳說は何に據つて構想された事であるか、又事實睪丸の大きかつた人を神樣と見たのかそれはいづれも不詳である

あら神の出現をキミテヌルと云、其出づべき前に其年の八九月の間にアヲリと云もの現はる、其山をアヲリ岳と云、五色鮮かにして種々の壯嚴ありて三つの岳に三本現はる、其大さ一山を覆ひ包む、其十月に至て神必ず出づ(中略)又ヲウチキウといふ海神現はるゝ事あり、其たけは一丈ばかりにして陰嚢殊に大きければ、褌を結びて肩に掛く、これ等の神の現はれし事ども正しく見たりし事の由記るせり、其國の人の君眞物と記したるは是等の神の事なりと見えたり、尚事の仔細は能く〳〵尋ぬべし

●巖石の如し

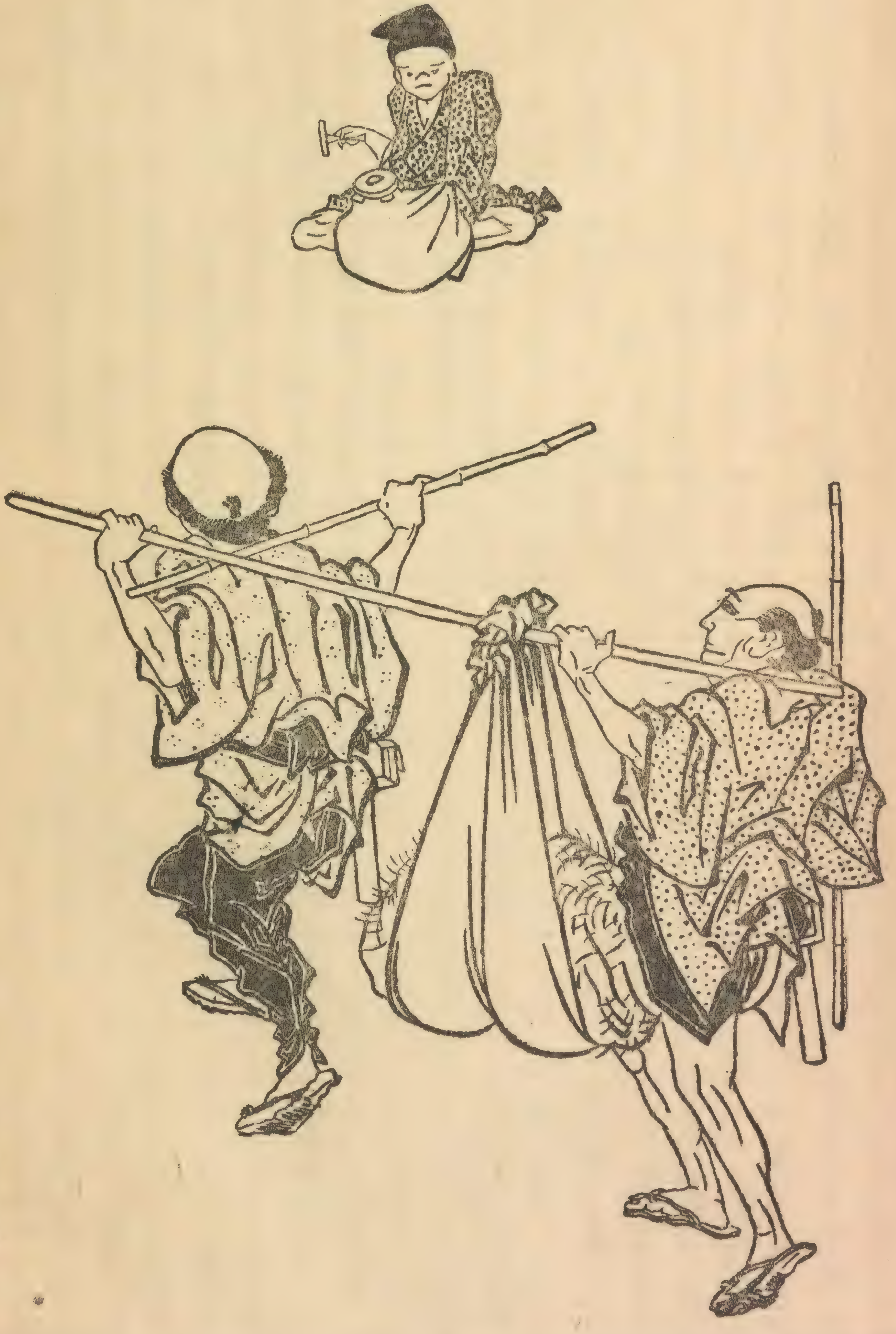
明治三十年四月發行『半狂堂隨筆』第四集所載

水戸の本間竹翁といふ老先生の寄稿である

狸の睾玉八疊敷の諺はあれど、曾て之を見し者無し、常陸の大睾玉はさる空言にあらず、實に近世の一奇觀なりし、本人現存中は拙者年々見物に行けり、一見したる所にては、迚も睾玉とは見受られず、宛ら巖石の前に人の坐するに似たり、二巾の前掛にて之を掩ふも、左右五寸程づゝ溢る、厠に行く時は妻子之を畚に乘せて擔ふ、實に五大洲中無雙の大睾玉なるべし、本人は固より貧民の事なれば、自身は年中睾玉の上にて藁細工をなせり右に付種々抱腹の事あり、先年江戸よりヤシ來りて、一ヶ年間百兩に傭入度由申込しに、本人はわら細工に勝るとて承諾せしも、親族の故障にて相談見合せと成りしなどの奇談もあり、其圖は桃源遺事にも出づ、西山公の撰文に曰く

常陸國鷹場村庄治平、年四十三歲、患斗疝久矣其腫年加於一年、今玆萬延元庚申初冬、使杉崎雪溪寫其眞





（北斎漫畫）

卷三

●賣買妄語と實說

嘉永三年版三好想山著『想山著聞奇集』所載

市谷田町四丁目（字牛小屋といふ）に、海野景山といふ周易觀相に秀たる賣卜者あり、此者生所は甲州にして、中年に至り伊豆浦に久敷住居たり、此時景山の隣家に疝氣陰囊に入て段々大く成、其大さ米五斗を囊に入たる程にて、形ち丸くして足を前の方へ組て座し居ると、頭より睪丸の方少し高く、前より見ると身體は陰囊に隱れて見えざる程なりと、依て外の手業は行屆かざるゆゑ、陰囊と胴との間より手を伸て脇腹へやりて自由に草履草鞋を造りて商ひ、可也に烟りを立て居たるとなり、或年十一月二日の夜の事なるが、此者の裏の方に相應の身柄なる者ありて、髮置の祝ひとて、名主初め大勢寄集り馳走と成、皆々夜更迄酒宴し、大酩酊と成て歸るとて、彼が門より音づれて、大玉は未寢ぬかと問に、內より皆樣よき御機嫌なりちと御寄りなされませといふ故、名主初め五人大生醉のみ入込て騷が敷、かの景山も上戶なれば、此人數に加はり大玉の所へ立寄たり扨醉のあまりに名主戲れて申樣、其玉は餘り見事也、ナント我等に五百兩に賣ては吳まじきやと云、彼者聞ていふ樣私の玉は伊豆の國中にての名物なり、五百兩や千兩にては賣れませぬ、三千兩ならば賣て進ぜませふと答ふ、イヤ夫は高し、負て置けよと云へば、イヤ／＼中々負まじといふ故、彼景山又戲に詞を添て申やう、成程此玉は名物、五百兩にては賣まじ、夫か迚三千兩には誰も買まじ、中を取て千兩にて御買なされませ、千兩ならば安きもの、又賣人も千兩ならば思ひ切て放すも宜しからんといふを、玉主の聞て、秘藏には候へども達ての御所望、殊に名主樣の儀、かたがた負て上げ候べし、一ッ〆ませうとて、大勢一緒に手を打、賣買の約をなして後、皆散々に歸宅なしけり、然るに其後名主の睪丸少々痛み出し、其內に段々大く成、後には大茶釜程に成て難儀せしといふ、又玉主は夫よりは日々夜々玉小く成て、三年程すぎて平人の通りに成りしかば、飛脚を活計として遠近へ上下せし由、されどもかの名主の玉も大きくは成たれども、大玉の僅三ヶ一程の玉となりたるのみにて、殘り三ヶ二程の分は、移る節に消滅せしものにや、いぶかしきことなり、世に忌べきといふ事有、笑ふべき事に非ず、兎角惡敷事又嫌ふべき事などは、戲にもせぬがよく、又善事と能眞似とは勤てもするが宜しき歟、名前も所もよく聞置たれど今は忘れたり、景山も俄に母の病

氣にて國へ行て、再び江戸へは來らずして尋るかたなく、殘り多し、是を以て見る時は、かの宇治拾遺に、右の顏に大いなる瘤ある翁、山に入て木のうつぼに隱れてありけるに、多くの鬼共の來りて舞ひ遊ぶ座に出て舞かなで、鬼共の興と成り、又必ず來るべしと云て、質に預り置くべしとて、鬼に瘤を拔取られて常の顏と成りたり、扨隣の翁の左りの顏に大なる瘤ありけるが、この事を羨み、重ねて先の翁に替りて、かの所に行て鬼共に逢つて舞ひつれども、下手にて興にもならず、よつて預り置きし質の瘤は返すとて、やがて投付ければ、又瘤を一つ增したりとの事も、嘘とはいひ難し又戸塚（相州）の大睾丸といふ事



ありて、昔元祿年間の事にや、東海道戸塚宿に大睪丸の乞食有しと云、然るに又此宿に明和安永の頃よりにや二代目の大玉有て、享和頃迄も存命にて有たりと、予子供心に亡父の咄にも能聞置、又ぶら〳〵つんだせ戸塚の金玉とて流行唄にもうたひ、名高き玉にて有たり、猶よく〳〵聞訂に此玉も大きけれども、米の二三斗ほども入べき嚢にて、前の伊豆の玉には中々及びもなき事と思はる、然れども、此玉にも一ッの不思議あり、朝の四ッ頃より八ッ半頃迄は甚だ大きく、夫より夕刻に成ては段々と玉を揉込て半分程となし、嚢にいれ首に懸て住所へ歸り、又朝出來りて段々揉出し、四ッ頃には十分に大きくなせし由、或年紅毛人（おらんだじん）通行の時、此玉を見懸て申樣、彼は實に不便（ふびん）の事也水を取て治療をなし遣度と通辭を以ていはせければ、かの乞食答て申樣、御志しは有がたけれども、私は何の藝もなく、幸にして今は陰嚢のおかげにて澤山に施を受、口腹を安穩に養ひ候へば、治療の事は免し給はれと斷れりと聞傳へたり、海内第一の海道に居る事ゆゑ、此玉の事は日本國中の小童迄も聞知らぬことなかりしも妙成事也、此玉、色は黑紫にてぶつ〳〵としたるはだにして、大痣の如き色にて、陰莖の所は凹（なかくぼ）なる穴と成てあり、側に鉦を置、是を打ならして錢を乞ひ居たりと、又予文政二年と覺えし、江戸九段中坂の上にて疝氣の足に入たる乞食を只一度見受たり、是の玉は米貳斗入程の大さなれども、疝氣玉より溢れて右の足に入此足股の所の太さ凡並の人の腹の廻り程もあるべく、足首に至り、少しは細けれども、足のゆび迄も肥大となり、爪は埋め込たる樣になり居たり、尤色合肌合は前にいふ戸塚の玉と同じ事也、此者は聢と見て能覺え置たるまゝ其體をかたばかり左に圖となし置ぬ、其外大陰嚢の乞食は江戸にても邂逅（たまさか）見當りし事も有れども是は珍とするに足らず、又予が友山崎美成文化十二年(乙亥)三月戸塚宿通行せし時、往來に席を敷て、陰嚢の上に鉦を置て打ちならして、錢を乞居たるを見受けたり、是は三代目の大睪丸と見えたりといへり

又云、今嘉永年に至りて、大玉の乞食江戸に出來たり、玉の大さ米二斗入程も有て、是又珍敷玉也、是は疝氣の玉に入たるにてはなく、肉瘤にて、元睪丸の脇に纔梅の實（み）程なる瘤出來しを、人のいふに任せ灸をすへし故、其瘤段々大きく成出し、遂にあのごときものと成、難儀せし由、全く睪丸は別にして、肉瘤の中に混じ有と或醫家の咄ぬ、種々の異病もあるものなり



（想山著聞奇集）

●新施術で切斷

大正十三年八月十一日發行『萬朝報』所載　桃泉子寄

（大連發通信）滿蒙醫科大學の診療班が先日蒙古の奥に入て珍らしい病氣を探す內、狸の八疊敷も斯くやと思はれる百六十キログラム餘（四十二貫餘）の目方ある大睪丸の所有者を發見した、醫師連は眞に世界一だと驚嘆し、滿鐵の病院に入院させ、松井外科醫主任と成りて美事に之を切り取つた、其後の經過は非常によく、患者は無邪氣に喜んで退院するのを待つて居る、右に就て久保田博士は「切り取つた大睪丸は早速ホルマリン漬として保存する筈だが、あまり大きいので容器が無いのに困つて居る」と語つた

●三斗入の叺の樣

明治四十二年五月發行『福岡日々新聞』所載

麑島山下町私立赤星病院にて此程手術した同縣肝屬郡牛根村磯口畩助（五四）の陰嚢は、象皮腫と云つて、重量百斤もあり、其形狀は丁度三斗入の叺の樣で、薄葡萄色を呈し、處々に葡萄の大疣がある珍症で、切開したところは、恰も鱶の胴中を眞二つにした樣で、頗る異觀であつたと

●蒙古の大睾丸

大正十三年十月一日發行『醫學及醫政』第九十三號所載前掲『萬朝報』の大連通信と同一人の事であるが、これは巡回診療團の一員たる長谷川粂太郎子が記述したもので、類話もまじる面白い報告である

但し前掲の四十二貫餘とあるのを、これには十八貫餘としてある、此方が正確であらう

今夏も暑中休暇を利用して滿洲醫科大學は東蒙古へ久保田博士を團長とする巡回診療團を派遣した、自分は其一員として犬馬の勞の幾分を勤めた（中略）最後の八面城へ着いた日は雨も歇み道は惡かつたが氣持ちはよかつた、土地の人の希望で舊市街の成和利といふ馬宿に開設する事と成つた例に依て患者は無料治療だからでもあらう、早朝から澤山に詰めかけられ、藥品其他の材料も悉く費ひ果たした夕方である、一輛の荷馬車に搖られて來た辮髮の四十男があつた、此れが此附近で有名な陰嚢象皮病患者牛某である、其陰嚢は荷馬車一ぱいに擴がり――それは日本内地の荷馬車の半分位の大さのものではあるが――一人の附添ひをして同乘し得ない程異大なもので、陰裏を包んだ淺黄地の褪せた布は其男の着衣よりも多分な布を要して居る、一同はそれをとり卷き啞然として傍觀するより外か手の下しやうもないまでに絶大なしろ物であつた、尤も此時は日沒に近く又手術に要する材料も消費した後であつたので、やむなく此れを奉天まで連行し、歸院の上施療する事にきめた、患者は旅館成和利と云ふと大相立派に聞へるが其馬宿の一隅に此者を宿泊させる事にした、日が暮れてからであつた、宿の親仁がやつて來て、あの男を泊めるのはご免だと言て來た、聞くと部屋の坑（土で築き上げた床で冬期火氣を通すもの）を拔き壞してしまつたとぶつ〳〵言ふ、元よりそれは古く朽ちかけて居たものにせよ、毎日旅人が泊つて居る部室に違ひない、それを踏み拔く程に素晴しい代物だつたのである

大陰嚢の事に就ては想山著聞奇集といふ文化年代の隨筆ものに數例を載せてある、小川劍三郎氏が其著刀圭閑話に轉載された、それの大略は、江戸市ヶ谷田町に海野景山といふ賣卜者が居て其隣家に棲む男の陰嚢は大さ約五斗を入れた程で形ち丸く脚を前方に投出して居ると頭より陰嚢の方が少しく高く前から見る時は身體は陰嚢にかくれて見へぬ程だ、とあるから、これ亦異大な物であつたと見へる、次

ぎに戸塚の大陰嚢の事が出てゐる、これは可成り名高いもので十返舍の膝栗毛にも戸塚の條で道中の大名に宿を悉く占領されいづれの旅宿からも宿泊を斷られた彌次喜多の兩名は仕方なく「とめざるは宿をせん氣としられたり大ぎん玉の名ある戸塚に」と落首を詠んで去るところは此大陰嚢を利かせたものである、刀圭閑話に依ると此の男より以前にも大陰嚢患者が居り、又其以前の元祿年代にも同じ戸塚に大陰嚢の非人があつてつまり初代から三代目まで續いて出たのである、それ等は皆戸塚の街道にうづくまつて鉦を叩き旅人の合力を受けて居たのであるが、前の市ケ谷の男は陰嚢と胴との間だから手を伸べて草草履鞋の類を造てそれを商ひ其日の煙を立てゝ居たらしかつた、戸塚の二代目の男のは其色黑紫色でぶつ〳〵の大痣の如な色をして居、陰莖のところは凹な穴と成て居たとあるから、今回の八面城の患者と同じ色で、しかも同じ形ちであつたに違ひない或時此二代目男を和蘭の醫師が道中にふと眼にし、其起居の不自由なのを察し、通詞を介して手術してやる事を申入れた所、彼は此陰嚢故に毎日路傍に錢を貰ひ受けて生活してゐるのであるから、今手術を受けては早速生活に困る故を以て、お志は有難いがお斷りすると受入けれなかつた、

此患者と反對である、此ほか文政時代に淺草藏前に居た乞食に矢張り陰嚢象皮病があつたが、それは起居にあまり不自由でなかつたらしいから、他のそれ等よりも小さかつたのであらう、瀧亭鯉丈は花暦八笑人第五編の下に、此藏前



の乞食を書き入れて當時の人氣を博した——戯作八笑人は鯉丈の代表作だが第五編の上中下三卷は他人の代作に成り例のきん玉の出る條は輿鳳亭枝成の作に成ては居る——此れにも「戯作者の穴はひとつの古狸かきひろげたるきん玉

の春」なる落を添へてある

其後嘉永三年、幕府醫學館助教大膳商道數が、醫學館で實驗した珍症奇病の例を集めて錄したものに、新選病双紙と云ふ書があつて、成島司直が序文を書き大阪の畫工福崎一寶が圖を描いてゐる、此書には矢張該病を病む乞食の圖を描いてあり文には「太股に大なるしひねの柔かに垂れ下りし男の子あり、見る人大方ふぐりの膨れたるにやあらむと思へり、いたく重かりければ布にて包み頸に掛けて歩みけりとかや」とある

明治四十年だつたかの勸業博覽會で、不忍池畔の衞生館に出品された實物標本を親しく觀たが、之れも亦可成りに大きなものであつたと記憶して居る、二三年前の中央公論で物語り作家の村松梢風氏は前記想山著聞奇集の記事は針小棒大虛妄の筆を弄したものだと斷定を下して居たが、自分は決して誇張と認めるわけにゆかない、此世に決して無い病症ではないのであり、當時の醫術では現代の蒙古に見るやうにそれをどう處置するわけにもゆかぬ幼稚な時代であつたがため、自然かうした病者も實在したのである

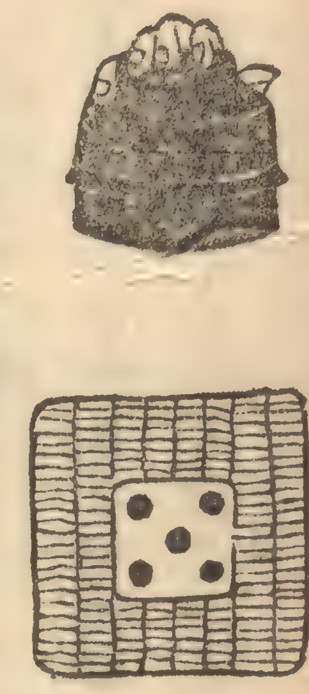
象皮病大陰囊患者牛某は、着奉數日後手術を受け數年間一步も步めなかつた十八貫餘の分銅から放されて、此頃では自由に步行し、廊下等で會ふ度び天好々々と喜んで居る、此一事でも著聞奇集の著者が荒唐の筆を弄したのでない事が首肯されやう

蒙古八面城は東蒙の入口で鐵道の便もあり、相當繁華な土地であるが、日本人は全部で十名とは居なかつたが、それ等の人々は診療の終つた二日目の午後、支那旗亭へ我々一行を招待して勞をねぎらふて吳れた、席上一人の男が言つた、此所は邊鄙な田舍でとてもお禮として御馳走する程の料理がありませんから、失禮乍らお禮として大キンを差上げますと言つた、で我々は其大キンを貨車に載せ大成キンに成つて歸て來たのであつた

（編者曰）以上の外、『理齋隨筆』には相州戸塚の大睾丸の事を記してあり、『新撰狂歌集』にも大睾丸の人があつた事を略記してあるが、いづれも同じやうな話だからこゝには省いて置く

豐臣秀吉が大睾丸であつて、馬に乘ると窮屈なので、駕籠に乘ることにしたといふ話もあるが、それは大睾丸といつても世間普通の大睾丸であつて、疝氣がヒネコビタ位のもので、上掲のやうな象皮腫に基く大睾丸ではなかつたのであらう

賭博川柳集（追補）



大正十二年五月に發行した『賭博史』に「賭博川柳集」と題して古柳句七十餘を摘錄したが、當時助手に蒐集せしめたのであつて、脱漏が少くない、其後自ら發見したのが同く七十餘句あつた、其中の難句らしいのを拔記して略解を附けて置く

と『變態知識』第一號に記して十句ばかりに略解を附けたが、其十句と殘り六十句、加之其後又々發見した五十句ほど、合計百餘句を茲に列記する

＊　＊　＊　＊

毛氈へのるが碁石の隱し藝
碁でない時には黑石かくがいゝ
股倉をばつかりあけて是が勝
三ぞろをさゝ波といふ人のよさ
四ッぴんだと五二べたをほうり出し
やんわりと伏せろ大家の戸があいた
年禮が來ると二階が靜かなり
うでけつかつてゐび二とは是だかへ
小一兩鷲に取られる大不首尾
まけこけて女房に眉毛つけさせる
勝まけはともあれ女房本目はり
五二べたを日本橋からほうり出し
五二べたのさいを東海道へ投げ
五二べたを女房ざく／＼汁へ入れ
寐せ付て折葉の乞目叱りに出
いつはりのある夜なりけり唐の芋
石尊は土場からすぐに思ひ立ち
岡場所のたいこは土場の片手わざ
むごい奴二文四文で二歩ゆすり
雜兵が二文四文は見逃され
勝つたなら逃げて來なよと女房いひ
誰かもう水をくむわと勝つた奴
袋棚から札を出す無盡茶屋
いち時に出るなと路次をそつとあけ
立膝で打つのは鍛冶屋の亭主なり
御預り申して置くと勝つた奴
盆呉蓙へ這はせる小僧百に成り
八分だぞ根こそぎはれどもんで入れ
御殿山三味の隣りはふせる音
是がうるさいと胴取奉賀帳
お勝ならもつとあがれと夜そば言ひ
勝つた日は異見いはぬが女なり
惣高の勘定をする負けた奴
本籤はたが取つたなと坪をふせ
供部屋の音を禿は不思議がり
てうのはんのめいに曰く日々にまけ
樽次に餅を買はせる賭將棋
坪皿を持ッてかけ出す放れ馬
勝つた奴紙とわらとのさしをより
親分は張口などに出た男
馬方のぶつうち垣をみなくらひ
寢せつけて亭主とかわる松の內
五月雨に四五文かけて屋根をふき

小人閑居してやたら伏せたがり
坪皿へ紙とは餘程かくがたけ
坪皿の明くを見て行く質使
きつい目が出たと口から一歩出し
どばの犬質屋の門に待つてゐる
夜盗ども見ろと兩手でざらを寄せ
博奕の事は聰明叡智なり
熊坂は外のばくちは嫌ひなり
坪皿へ紙を貼るのは人が好し
勝つたならしまへ明日は遠くだぞ
酉の市船でも伏せて行く所
うしろから目にも立たずに五百まけ
扨火をとぼしといはれどう二にげ
鼻ッ張り此れべい受けたなどゝ云ひ
コリヤ見なとはたけて見せる負た下女
富札の引裂いてある首縊り
勝つた奴そろ〳〵逃げて音さびし
神前までは坪とござ敷きつめる
酉の町江戸をくらつた胴が見え
博奕宿言譯だけの店を出し

負けた奴百を手玉にとつて居る
よく知つて來たなと坪をおつふせる
四割でも坪はこわいと女房いひ
鳥は物かはとやめない負けた奴
根津のぎうつとめを土場へとりにくる
錢ッ切りぶてと親分いけんなり
おめかけの親取ると負け〳〵
お前いつ氣が直つたとぴんを打ち
勘當の中にかるたが大上がり
盆蓙へ木枯のする酉の市
がくやのばくち鎌倉の諸大名
釋迦十が出たで煤掃げびるなり
怖そうに四割を伏せる松の内
いろ〳〵にからだのかはる博奕打
盤上は坪に押される無盡茶屋
それ〳〵の道具ひらでは伏せにくい
今川も酒の次には坪のこと
百負けて爰に哀を下女とゞめ
亂がしいものは折葉の叩ッこ
花に坪皿とはさすが下部なり

紋つけをみんな附けたで取りは取り
紋つけにひいきをはぶくひつらこさ
みゝッちく張りやれとセナア坪を伏せ
百目がけ餘程こうじたばくち也
ひだるがる馬に博奕を見せて置き
道間へば博奕について行かつしやい
一ねいりしてもやッぱり錢の音
氣の毒さ碁笥から采が一つ出る
押つ伏せる坪へしづ心なく散る櫻
負けた奴寄り掛るのを氣障にする
いんのこ〳〵そつと伏せなさいな
素人坪床も打ち拔く程に伏せ
およつたぞさア坪にしやう〳〵
子傅りをばのがすなゑゝと長半場
手を出すな氣になるよせと肱をつき

前にも記した如く、禁句になつた後にはなく、又寶暦時代前にも二三句の外はない、一茶の俳句に、「いとほしき馬も博奕にとられたり」といふのがある

澤田氏の縁切寺

西原柳雨

私は豫て川柳鎌倉志と云つた風のものを物して見ようと思立ち彼是千二百句許集拾して置いたうちに松ケ岡に關する句が三百有餘句あるので特別の興味を以て此書を拜讀したのであるが考證精確説明簡潔御世辭なしに近來稀に見る好著たること首肯したのである併しながら多少の遺缺誤寫は誰が遣つても免れざる所強て求めたら此書にも亦見出さるゝであらう、されば異見あればどし／＼發表し不足あらば遠慮なく補遺して再版の參考に供することは寧ろ著者に對する好意であるとの確信の下に此稿を起したのである著者及び讀者願くば此意を諒せられよ

(1)年代の遺落、但數字は句頭にある番號、

寶暦、三、四六、一五六、一八八、二〇〇、二六六、
明和、五、一七、二四、一〇二、一〇四、一一三、一七八、一四七、
一五三、一八一、二三二、二四一、二四三、二六二、
安永、四、三四、四一、六四、一一二、一二二、一三〇、一三五、
一三六、一四一、一四三、一四六、一五一、一五二、二五六、
天明、七六、二〇四、
寛政、一二〇、二五九、
文化、三、四〇、六三、七五、二二四、

但し或は誤謬なきを保せず再調せられたし

(2) 解釋上の異議

四、「帶代と書いた手でくる離縁狀」は一般の三行半にて松ケ岡には無關係にてはなきか

九七、「さあ事だ嫁迯を外へかけ」是も只逃ぐると云ふ丈にて句面には些の松岡臭を感せぬ尤も渡場の嫁の如き例もあれど夫とは同格に論せられぬと思ふ

一三八、「鶴を的矢を射る如く十三里」これは明に遠乘の句であらう

一三九、「榎を飛越すと娘に化ける」「十三本とう／＼榎嫁は越し」は十三本の上五で確乎不動なれども只榎を飛越す丈にて松ケ岡と斷定するはちと無理ではないかとおもふ、飛越すとあるので只の縁切榎とも取れず、飛越す、化けるなどの用語から推して直に王子の裝束榎とすれば娘といふ字が必適せず結局私も不明である

二八、「十三里先きだにたつた四里尋ね」の四里を六郷まで捜すとあるは誤解ではあるまいかと思つて居たに卷尾に至り鹿鳴庵氏の江戸中と說かれてあるので最早云ふべき所はない

二四八、「松風の音で寄年を吹戻し」是は孔明の彈琴にて此編より除却すべき句とおもふ

三三、「縁切るや鎌倉殿が後ろ立」原本にはどうあるか知らぬが私の寫には「縁切りは鎌倉殿が後立ァ」と成つてゐる是は只御參考迄

二六六「松ヶ岡十六文の顔はなし」私も從來外骨氏と同樣に十六文と解して居たるも万句合に「十ヲ六」とあるを知て偖ては「ジフロク」でなく「トヲロク」であると知つたはよいがさて其十ヲ六が今に解らぬ「腐つて來ると十ヲ六に賣つてやり」と云ふ句が安永六年度の萬句合中にあるより推解するに十個十文のものを腐れ出したので六文に負けてやるとの義であらんも何か品物は解らぬ結局の所松ヶ岡に駈込む位の女にそんな麁末な御面相はないと云ふこと丈は動かぬ所であらう

(3) 遺補百五十餘句

載句二百六十餘句の中に私の記錄に洩れてゐる句が丁度百ばかりあつたので大に喜んで直に記入したのである、その外從來不審としたる句義も此書によりて氷解したものも鮮からず大に感謝の意を表します夫と同時に私の記錄にあつて此書になきもの亦百五十句ばかり見出したのである無論殆んど同型同趣の類句もありて著者の態と省略せられたもののもあらう、又駄句狂句として特に排除せられたものもあらうが、かゝる種類の書籍には類句であらうが狂句であらうが成るべく多く蒐錄した方が參考の資となるであらうと思つて以下序列することにしたのである、聞く所によれば穗積重遠博士も松岡川柳史の高著あると聞くが未だ拜讀の機を得ぬ、そこで參考の資料になるか成らぬかは別問題として兎も角も私の集めた丈の句を送呈したいと思附いたのであるが澤田氏も穗積氏も御芳名を知るのみで一面の識なく直接送附も不躾と思ひ貴誌の餘白を藉ることにしたのである萬一御入用の句があつたら御使ひ被下たく又私も必要に應じて御拔載の句を我物顔に登錄することを御許下されんことを御願して置きます、總じてかう云ふことは一人よりか二人、可成多人數の力を藉りるが早道と思ひ升から此外に洩られた句を更に御發表下されんことを大方の同人諸君に切望する、符號(寳)は寳暦、(明)は明和、(安)は安永(天)は天明、(寛)は寛政、(化)は文化、(政)は文政、(保)は天保、

落附かぬ筈鎌倉が胸にあり　(安)

鎌倉の道など聞いて嫁おどし　(保)

よく〳〵の事相撲迄嫁は行き　（天）
たへかねて嫁は優婆夷に三とせ成り　（化）
親子していびりましたと松ケ岡　（明）
心魂にてつして嫁は十三里　（化）
鎌で手を切られて婆々ァくやしがり　（天）
鎌倉に及ばず姑頓死なり　（天）
是非なくも嫁ははだしで十三里　（保）
嫁倉へ行く四五日はよせつけず　（明）
千日のがれのこと嫁おもひ出し　（天）
遠つ走を嫁のするむつかしさ　（安）
寺入りも嫁のするのはむづかしい　（天）
三年は男ひでりで旅支度　（寛）
日帰りと三年帰り鎌へ行き　（天）
嫁路金十三匁持つて逃げ　（天）
嫁の旅元の鞘にはおさまらず　（天）
男ならこゝ迄來やと嫁はにげ　（天）
鎌倉の前に二三度里へ逃げ　（安）
舟賃を六文出しておあき越し　（天）
舟賃におあし十文ついてせき　（安）
追人でも來ますかと聞く渡守　（明）

サァ舟を出してくれなと女房せき　（安）
急ぐ嫁一棹もどす渡守　（安）
乗合つた人もじろ〳〵嫁を見る　（安）
乗合ひでひそ〳〵嫁は評をされ　（安）
六郷を越すと前垂持つてかけ　（天）
男より太いものさと渡守　（安）
女犬でも見かけませぬと渡守　（天）
知り申さねへと奇特な渡守　（天）
渡守知らぬといふは情なり　（安）
其女昨日越したと渡守　（明）
大わらはに成つて渡場でとらへ　（安）
渡場で〇れ切つたのをつかまへる　（安）
二分〆た雲は仲人と行ちがひ　（安）
こいついゝ乗せものと雲嫁につき　（天）
雲助のいひ値に乗つてけどられる　（天）
鎌倉へ宰領なしの美しさ　（明）
憎いこと通駕にて嫁にげる　（天）
道筋はくもが敎へる松ケ岡　（天）
地輻の際で雲助に一分やり　（天）
鎌倉だのに迷子のおあきャーイ　（天）

さぞ御心遣ひきつと鎌倉さ　（安）
鎌倉へ義理で立つてく兩隣　（天）
スハ鎌倉と股引で二三人　（安）
五六人わらぢはかせる惡い嫁　（天）
早天さう／＼相州へ追人行き　（政）
追々に追人十三人通り　（天）
地輻をまたいで追人はこきぬかれ　（安）
尼寺を四五町にしてとつかまれ　（明）
泣く嫁の中に泥足五六人　（天）
おそまきの追人江の島迄參り　（天）
江の島へ廻るあはゝの三太郎　（明）
江の島へあはゝの追人まはる也　（安）
わらぢ連ゞいたはつてやる松ケ岡　（安）
運のなき燒餅坂で追つ付かれ　（安）
さんめふさがし離山でおつつき―♀　（天）
離山とは吉相な松ケ岡　（安）
離山見得（けんとく）にする女旅　（安）
合はせ物は離山さして迯げ　（天）
女房の旅は亭主を離山　（安）
谷七郷をまごついて嫁あるき　（天）

うろたへた女五山をあつちこち　（安）
今いゝ駈込があつたと掃いてゐる　（天）
掃く程來ると禪寺で噂なり　（天）
奇麗な寺へ駈込で叱られる　（安）
向うの寺がそさと箒で教へ　（安）
箒の柄であの左の門がそだ　（天）
此向うさと竹箒にて教へ　（安）
にこ／＼と何かさゝやく竹箒　（政）
奇特さは建長寺から人をつけ　（天）
後を見い／＼東慶寺尋ねてる　（天）
美しいびっこが這入る松ケ岡　（天）
泥足で玄關へ上る松ケ岡　（保）
板橋で別れ鎌倉迄行かず　（保）
松ケ岡今は榎ですますなり　（政）
榎で切れぬ時は松へ行き　（政）
いんくつな寺いけずるい國へ立て　（天）
釣合はぬものは相撲に松ケ岡　（安）
其國の女は見えぬ松ケ岡　（政）
二十には成るやならずに尼になり　（安）
初手の尼寺で仕舞うてかへるなり　（安）

住持様ばかり男を持つて見ず　（安）

尼君へお松さつそく目見得なり　（天）

今入りの女中を比丘尼達なぶり　（天）

車座の比丘尼の中にはづかしさ　（天）

子を置いて行く鎌倉はにくがられ　（天）

松ヶ岡目へさす程はまだ殘り　（寶）

經文に假名附をする松ヶ岡　（寶）

思ひきや鎌で髮迄切らうとは　（化）

鎌倉の松はみどりを切るところ　（政）

鎌倉で俵のやうな枕をし　（寶）

倉の嫁三年ふぐを食はぬ也　（安）

たち物は男とそして魚類也　（天）

三年の斷物をして緣を切り　（安）

男といふもの三年見ずにゐる　（化）

男たいしたものもない所へ迯げ　（天）

男っきれのない所へ迯げて行き　（安）

仇に夜を千夜〃あかす松ヶ岡　（安）

夢ばかりなる鎌倉に苦行する　（安）

松ヶ岡男の夢に風呂を立て　（安）

鎌倉の松にふぐりのないお寺　（寛）

〇〇玉を門外に置く松ヶ岡　（明）

松ヶ岡大工に番をつけておき　（安）

松ヶ岡けちな面ラでは行きにくし　（天）

これ故と笑窪つき合ふ松ヶ岡　（明）

お比丘尼シ人のほしがる顔があり　（天）

鎌倉の地輪をまたぐ美しさ　（安）

もうお前三年程と爪を掛け　（安）

松ヶ岡花散る里となぜ云はぬ　（明）

人知らぬ山の櫻は松ヶ岡　（安）

さんげしな〳〵よと松ヶ岡　（安）

八九月おもに駈込む松ヶ岡　（安）

松の上にも三年で緣が切れ　（天）

松へ三年隱れると娘なり　（安）

いゝ娘佛隱しで三とせなり　（化）

尼寺であつたら嫁をふけらかし　（天）

鎌倉のいけすへ嫁は身をはしけ　（寶）

ざんねんの濁もすてる松ヶ岡　（保）

三年向顔せざれば緣が切れ　（天）

とんだ嫁他國で年を三つとり　（天）

あまさかさまに暇をとる松ヶ岡　（化）

縁談は出雲破談は松ヶ岡　（化）
雲州は會者相州は定離なり　（天）
くやしさは在鎌倉へ書いてやり　（天）
お松殿岡右衛門と書くごうはらさ　（安）
去狀を馬づけにする松ヶ岡　（天）
覆水盆にかへらぬ鎌倉なり　（化）
ひきからむ縁をかきゝる鎌の寺　（寛）
松のきとくをあらはして離縁狀　（天）
亭主大病鎌倉を見合はせる　（天）
誰が智恵をつけたか嫁はわらぢ也　（安）
二人ッ見えぬで鎌倉じやないと云ひ　（安）
鎌倉に居ないと事がむつかしい　（天）
地輻をまたぐ迄間男見えかくれ　（安）
再縁を三とせは玆にまつヶ岡　（天）
三年目さてこそと云ふとこへ嫁し　（天）
氣が變るまいものか鎌倉で疱瘡　（天）
在鎌倉の内に間男氣がかはり　（天）
三年の内に間男氣がかはり　（天）
尻みやの洗濯をする松ヶ岡　（天）
洗濯に三年かゝる松ヶ岡　（安）

琴柱ほど榎を越えて縁につき　（天）
若比丘尼さ○に歸るをけなるがり　（末ツム）
尼寺へ江の島かけて母はより　（明）
廣い身になつて江の島迄も見る　（安）
名の高い月夜の中で縁を切り　（天）
星月夜あきる程見て縁を切り　（安）
三年過ぎると一人ッは歸れ得ず　（安）
三年目からの道まで通りぬけ　（安）
松ヶ岡半てつ者のより所　（寶）
尼寺の場を江戸へ出る田舍乳母　（安）
寺這入りとんとつまらぬ事が出來　（明）
睦しく夫婦連にて松ヶ岡　（天）
雛様も三年しまひ込んでおき　（安）

以上は大抵大丈夫とは思へど勘違なきを保せず

(4)　疑問の句

白ぬめを三筋に分ける松ヶ岡　（寶）
お前もかりた撞木さと松ヶ岡　（安）
松ヶ岡故にお富も三とせぎり　（政）
ごく女房裏迄かへす松ヶ岡　（明）

以上

古今物[illegible]

全

本書の解説に代へて

「去る明治二十七年の頃内田某又は和田守某と云へる山師があつて、記憶術を發明したりと稱し、三圓以上三十圓程の傳授料を取つて人に敎へ、一時世に喧傳されて朝野の名士と稱せらるゝ輩までが爭ふて其傳授を受けたが、中にも可笑きは角田眞平と云へる者が同じく其講演を聽きに行きナルホド和田守の發明と云ふ記憶法は有益なものであると感心して、其歸りがけに自分の帽子を忘れたと云ふ奇談などもあつた、其頃我輩は山師の仕業が癪に障つたので、心理應用の「忘却法」と云ふを著はして世に公けにした、それは西哲の云ひし「忘却の必要なる程度は記憶の必要なる程度に均し」といふ格言に基いて、智力的忘却法即ち斷念法感情的忘却法即ち轉移法、意志的忘却法即ち反跳法の三に別つて解説したのであるが、ソレに續いて井上圓了は失念術講義、杉山藤次郎は新奇忘却法と題するものを編輯發行した、記憶力の强弱は其人の天性にあることで法術などの効力は甚だ少いものである、されば一時喧傳された記憶法は内田某和田守某の財布を肥やしたに過ずして、間もなく世間に忘れられて了つた、古い俗謠に

昨夜色里で、はやる小謠を習ふた、後先ヤア覺へなんだが、中の所は忘れた、さアこそあンべけとて、書いて貰たが、それさへ出口へ置いて來た

などいふのもある通り、忘れッぽい者は如何にしても忘れる、それであるから記憶法研究は一種の滑稽に過ぎない、隨つて又それを當てこすッて忘却法を著はすなども滑稽的の痛罵に過ぎないものである

近頃古書を涉獵して明和の昔にも右と同じ樣な事のあつたのを發見した、それは明和八年頃京都に前記の内田某や和田守某などゝ同じ山師學者があつて、「物覺秘傳」、「物見知秘傳」、「人間記憶秘法」など題する書物を發行して、私利を貪つたので、諼草堂主人と號するスネモノは「古今物忘れ」と云ふ奇書を著はし、和漢古今の歷史は固より詩歌俗謠落語等、物忘れに關する記事數十項を集めて發行した」

以上は去る明治四十二年五月發行の『滑稽新聞』に揭出した記事の冐頭である、角田眞平が帽子を忘れたといふ話と同一轍の事があるとか、爲永春水こと佐々木貞高の著『閑窓瑣談』の一節を引いて、宿屋に於ける茗荷談の奇拔な落語があるとか、『鄙都言種』の物忘れせぬ呪文の滑稽である事などを述べたのである、本書の解説に代へて玆に拔載して置く　（廢姓外骨）

序

いつのとしにかありけむたゞ日のながきころとはおぼへける吾徒諼草堂の主人ひとつの案をもて來て是に序書くはへてよといふによみてみればそもむかしより物忘れたる事どもゝ多かりけるさてかゝむとおもひてそのまゝにわすれ置つるまたいくたの月日ぞやことしはす十あり三日煤たれたる蘆屋かきはらふとて物の底より出たるに又も忘れやせむとゝみにかいしるして彼主人にみせければ主人みていはく是誰がつくれる書ぞや我名を綾足とかいふものしるす



仙女忘れ草か傳

爰に仙女あり。名を忘れ草といふ。としは百とせにひとゝせたらで。そのなまめけること處女のごとし。都東の川邊に住居て。世にひろく物忘るゝ事を敎へけるに。是をならひ得むとて人集り。扨是をならひにゆく人。禮物を懷にして參るといへども。其家にいたると忽忘れて。終に出さず仙女又取事を忘れて終に受ず。さるは仙女誓ていはく。我今傳ふる物忘れの事は。忘眞先生のつたへ給へる法也。又それにみづからが工夫をくはへて敎ゆ。今日は先忘眞先生の敎を申すなり。又是をならはむとあるには。神に誓ひする也といひて。ひとつの卷物を出してよみて曰。忘れたまへ／＼。そも／＼心は胸のうちにありとはおもへど。終にそのかたちをしらず。是につけば彼を忘れ。かれにつけばこれを忘れ。生れては母の腹なりし時を忘れ。生長ては兒なりし時を忘れ。老ては若かりしむかしを忘れ。かく能忘るゝ物ゆゑに。死なばいける時の我なりしをも忘れむ。しかれば心はもとより忘るゝ物とおぼすべし。扨今汝達のぞみたまふによりて。能忘るゝ法をつたへまゐらす。汝達此法を得て。少しもつゝむ事なかれ。もしこれをつゝみて人に洩さゞらんにおいては。黃泉平坂にます忘れの神の重きつみおふせ給ひて。たちまち物忘れがたき人となし給はむ只忘れ給へ／＼と敬て申すとよみ終り。先神文のむねはかくのごとし。扨物忘れんとおぼさんには。目を大きく開き給へ。心を專らさわかしくしたまへ。これ敎のひとつなり。扨頂をもつて第一とし。目をもつて第二とし。鼻をもつて第三とし。その次は乳房より腹に及び。左右の耳肩手脚(てあし)にいたりて。しるすところ凡三十所。これをよく一つ／＼忘るゝには。まづ頂(いたゞき)を忘れんとするには心を脚におく。目を忘れんとするには心に膝をおもふ。凡此法に從ひ右を忘るゝには左をおもひ。左を忘るゝには右をおもふ是をよく習はすにいたりて。漸く身を忘れ終に我眞を忘るゝにいたる也。先今日はこれまでにて歸り給へ。扨あすといひて別るゝに。その人はや業を忘れ約束を忘れ病人をわすれ。かならず其次をならはんとおもひて。あかつきとく仙女がもとにいたれば。仙女又朝食を忘れて出て敎て曰。いかにや能忘れ給ふや。弟子こたへて曰。奇哉／＼まづ物三十ばかりはたしかに忘れたりといふ。仙女曰よし／＼今日をしへ侍るがひとつのゆるしなりといひて。聲をひそめ。腰うちかけたる下部を外に追ひ出し。戸をさしかためていはく。

先表の門を忘る。次に座敷を忘る。つぎに竈を忘る。棚をわする戸を忘る。雪隠を忘る樹を忘る。此數はかりなし。百にいたり千に及ぶ。我家の財寶器をつくして。他の家々或はとほき國までも。あるとあるものを忘れ盡して。終には物忘れの先生とは成事也。そのうへ奥儀とするをしへのはべるが。その術いたりて後傳へむといひをはりぬ。扨習ふ人いとゆかしくおもひて。日を盡し月を經て往通ひつゝならひけれど。始にかはれる事更にあらず。仙女が物忘れにも違はざれば。或時人居らざる間をはかり。遺れる奥儀を敎へ給へといへば。仙女聲をひそめて敎て曰。外にかはれる事もあらず。忘れ貝の肉を萱草(わすれぐさ)に交(まぜ)て。武藏野の忘れ水を汲よせて。是に煮て喰ひたまへ。しからば大忘れの先生となり給はむとなりける。扨後その習ひ得けるひと〴〵世にたふとき敎なりとおもひしかば。彼神文にたがひ。かつてその法を世に洩らさゞりしに。仙女うちはらたちて。我法すでに世にみたず。いつまで是を敎へんやと詈りて。終に物忘れの術をかへけるとぞ。

古今物忘れの記

○日本武尊夷を平げんとて。東の國にくだり給ふ時。伊勢の國小津の崎にいたりて、御食きこしめしつゝ。佩せる御太刀をひとつ松の梢にかけて。終に忘れ給ひてくだりましぬ。評曰これ勇なり

○泊瀬淺倉宮の天皇雄畧は。三輪川の水に物洗ふ未通女を叡覽したまひ。則ち大宮にめし入れんずと。のたまひ。ちぎらせて。忘れ給ふこと八十年あまり也。評曰御こゝろおほし

○ある法師。京の古跡を見巡りけるに翁出て。河原左大臣の御跡を敎へ。さるむかし語りをもし。又山々の名所をもかたりて。扨忘れたり秋の夜の長物がたりよしなやとぞいひける。

○記憶といふ事のはやりけるとき。或人是おぼえんとて。手を心に入けるに。かたへに火桶のはべりしを忘れて。手を懐にして。胸をおさへ。袖を投懸たりしかば。終に火つきて燃入りぬ。扨俄に肘のあつく成たるに。驚きさわぎて。消なんとしける間に。彼辛苦しておぼえつる事をは忘れにけり。

○むかし女ありける。としを經て男のもとへ。猶此事とげんといひやりければ男。

今までに忘れぬ人は世にもあらじ
おのがさま〲年の經ぬれば

といひて男なほあひはなれにけり

○他の財寶をおほく負たる人。健忘といふ病にあたりて。くるしくしけり。それをみておはせたる人。漸々にくかりし心を忘れにけり。評曰これはこゝろづかひしつるをゆるしたるならん。

○大政入道清盛は。おそろしき事を忘れ給へり。

○ある遊女のよく物忘れするがありしかば。人みなその女か心の奥こそあらめとゆかしがりて。我しりえんとぞ往通ひける。

○今は昔。島原の遊女名は例の忘れにけり。人みなよしとほれまどひけるありしに。奥州よりのぼりける人。彼遊女に深逢ひしが別るゝ時に物つかはして。又あひ見んまでなどいひければ。彼遊女これをみてぞおもひ出なんといふに。傍に歌よくうたふものゝ居て。是を聞居けるが。線にしらべてかくなん。おもひ出んとは忘るゝからよ。思ひ出さずと忘れなよ。とうたひてあたへける。評曰思ふに此遊女忘れ草が傳を得たるや。

○親の忌日にあたりて魚を喰ふ。忘れてくふが罪深きか。覺て食ふが罪ふかきかと。一休和尚に問ひければ。一休答へて。何とやらいふことなりしが忘れたりとぞ。

○冬は夏を忘れ。夏は冬をわする。

○得ては師を忘れ愈ては醫を忘る。評曰おほよそかくのごとし。

○播磨の國にはそも物忘れせし人多かりき。

○おもふ敵はよく討たれど。門の前に印つきたる鎗を打忘れおきつるは。すこし物さわかしかりしといふ人あり。傍の人曰それは夜討のならひなり。評曰夜盗あに鎗を忘れ置んや。

○わかき男。女にいひかけられて。心にもあらで住ゐけるさるを少しあきがたにみえければ。男出てゆくとて。

思ふには我も思ひし今し汝が忘るとならば我も忘れん

或禪師評。七通八達

○槇野伴雄といふ完人あり。よく鮎の毒をさる事を覺居りける。ある國守きこしめして今夜客あり。鮎喰むとのたまふ。しれるごとく調へよと仰ければ。伴雄答へ奉りて今朝より心持あしく仕りけるが。俄に午時の程より。し

きりに物忘れつかまつるに。大切のたてまつり物なれば鮎つくり候事は許したまへと申て。まかんでける。評曰よし。

○或人足袋はきをりける事を忘れて。そのまゝ湯に入けるが。脚をあらふにおぼえなかりしかば。大聲を出して。我いたくしびれ病にあたりたり。醫師めせとぞいひける。

○天若彦といふ神は。天照大御神の御使にて。西國にくだりけるが。大汝貴（おほなむち）の御いきほひにおそれ。下照姫の色にまよひて。終に御かへりごと申ことを忘れにけり。

○黄帝赤水のほとりに遊びて。玄珠を忘る。扨誰かとりえて歸らんとはかり給ふに。象罔といふ大忘れ人あり。幸いきてとりかへる。或人評曰智惠は是小物

○遺二却珊瑚鞭一白馬驕不レ行或評曰遺却かへつて路傍情

○泊瀬並木宮（はつせなみきのみや）の天皇武烈。民はみな御子也といふ事を。よく忘れさせ給ひける。

○物忘れする媒。彼祝の席にいきては。歸るといふは忌言なれば。ひらけといへと習ひたりしを。よく忘れじとおもひ居けるが、扨祝ひすみて人々まからんとする時。此媒我等もまかりかといひ出たるを。傍の人心づきていたくそれが尻をつみければ。はとおもひてまかりつめらんといひて立ける。

○物おもひ出さんとする人は。かならず目をふさぎて口をあくもの也。評曰眼をふさぐは腹のうちをみるなり。口をあくはくるしきを吐くなり。

○女三の君小侍從にきこえ給ふは。いざとよみしほどにい（むしはみ）給ひしかば。ふともえ置あへで。さしはさみしを忘れにけりと。評曰此忘れまさに柏木の衞門をころしたまへり。

○釋迦牟尼佛の徒弟。維摩がいほりに集りし時。ありしものくはせざりしかば。舍利弗まづ饑たりしに。佛香積國より香積飯をとりよせてくはせ給へば。舍利弗たちまち食念を忘れたり。或人評曰是かならず蓮の飯成べし

○物忘れたる人は。かならず門に出て。脚をこまかにかさねあゆむもの也。

○或人山をこゆるに。道を忘れてあらぬ所に迷ひ出しかば。日も暮るゝに。大きなるうつほ木のあるに入てうづくまり居けり。しばしあるに人又我ごとく迷ひ來りぬ。誰そといへば道を忘れて爰に來しもの也といふ。さらばとてともにひきいれて宿りをるに。又ひとりさのごとくして來れり。なぞといへは道を忘れて爰に來つといふ。さら

ばこなたへとて今は三人になりて×ぞりをりけるに。夜いたくふけたりとおほゆるころ。大きなる蛇木のそらよりはひくだりて。その三人をのまんとする時。三人ともに南無三宝といふ。これ此言のもと也。物しり評曰。近世いはひて寶の字に書かへたり。

○秋八月ばかり。俄に夜嵐たかく吹出て。東の海あれとよみしに。船八百艘あまり浪にしづみ。人は千人あまり死うせけるとき。唯一人上總の濱におよぎつきたる舟子あり。扨後にきけば。もとのごとく船乘していきかよふとぞ。評曰忘るるが業なり。

○みやこ室町のあたりに。とし八十ばかりなりける老人あり。此老人井をほらせけるに。その井にうめける筒の。筒いくとせはかり朽ずしてたもつべしやと問ひければ。筒入るをとこ答て曰。およそ七十年餘りはたもつべしといふ。此老人聞て。汝しかとうけあふべしやといひける。

評曰此老人我老を忘れたる也。

○鳶飛て天にいたるといふ。扨彼を捕へて久しく飼ひつるに。物ぐさきやうにて。喰んとするにも飛來ず。まして高くのぼる事は忘れにけり。

○筑紫にくだりて住ける人の歌に。

あまざかる鄙に五年住居つゝ
　みやこのてぶり忘らへにけり

評曰そも〳〵都の風俗といふは。帯は高くむすひ低くむすび。髪は高くゆひひきくゆひ。羽織又長く短し。たとへみやこに住をるとも。おぼゆるひまはあらじとなん。

○右近少將ときこえ給ふが。おちくぼの君のもとにいきて。歸りたまひけるに。笛なん忘れ置給へるを。とりに人つかはしたれば。是をさへ忘れ給ひければとて。おちくほの君

是もなほあだにぞみるべき笛竹の
　手馴しふしを忘ると思へば

○或武士主人の使にいきて。しばし人出來るを待あひだに衝立のはべりしを見をるに。楠正成が正行に別れのさまを。手をつくしてかきたるに。心をそめてつく〳〵とみとれける間に。人出來たれば。しか〳〵使のむねを申終りぬ。さて御名はと問はれておもひをりしまゝに。楠多門兵衛と答へけるを。けしからずおもひしかば。今一度承らんと問ひかへされて。はとおもひしかどすこしもさわがず。楠田門兵衛といひなほしけるに。人いりて又その返事をのべてかへしけるに。使主人のもとにかへりて事を

申終り。扨願書を出して。今日より家の名までも改て。楠田門兵衛と仕りたしといひ出したりければ。主人あやしみ給ひて。何故と仰出されける時。今日なん御使のさきにて。さる事はべりしと申上たれば。主人心ある人にて。他事に物忘れしたるならばこそあれ。正成の圖に心をうばゝれしは。いとたのもしき者かなとありて。領所も加増物頭にすゑて給はりける。

○としの果となれば。物負ふせたる人は。負ひたる人のもとにたちかゝり。負たる人は財寶もたる人の許にいはひふして。或はなげきあるひは怒り。或はわびあるひはあらそふ。さるは朝烏鳴わたりて。日影いとにほやかにさしのぼれば。松吹風ものどやかにて。人々先は忘れたる顏色なり。

○物をしみする長あり。ひとりの母死けるに。從弟どもうち寄て。かたみおくりせよといひければ。いなせまじといふ。何故にとゝへば。かたみこそ今は仇なれとよみつれば。人になげきを負はせていかにせんといひける。評曰人豈古嫗のかたみをみて。是なくは忘るゝひまもといはんや。

○或人忘れがたみといふ事は。いかなる心にかと思ひけるに。人答へて曰。忘れ難みといふことなりと。評曰世の人心何ぞ忘れ難からん。

○ある男。女に物いひてはべりしに。今夜は我許に來て寐よ。門もさすまじきにといひちぎりて。扨その夜打忘れて寐入けり。女來て門を叩くにおき出ざりければ。たばかられしとおもひて。そのまゝにかへらんもくちをしくて。躊躇たるを。ある男來かゝりたるが。みつけてそゝのかして持て行。ついに妻となして住居けり。彼忘れたるをとこ。友だちなりしかば。程經て行たりけるに。そこの妻となり居しかど男忘れたれば。何ともいはず。女も又何ともいはず。その男猶何ともいはず。評曰罪なし。

○青菜を食ふ虫のうごめくが。終に蝶と成りて飛めぐる。いかばかりたのしからむとおもへど。彼又うごめける時をば忘れたるなるべし。

○かくや姫は竹取の翁のもとに。二十年あまりやしなはれ給ひしに。天より飛ふ車をおろしてむかへ給ふとき。いたく此國のわかれを惜みてなげき給ひしに。天のむかへ人おそし〳〵といさめて。天の羽衣をうちきせ奉れば。翁をいとほしとおぼしたる心さへ忘れにけりと。爰に蘇生たる人評曰。死るときは正にかゝる物也。又さとり人

傍に居てさいふことをしかりて曰。好箇外道
○大宰の大監大伴百代が歌に
ぬば玉のその夜の梅をた忘れて
折らで來にけり思ひし物を
評曰。これあに梅ならんや。
○佛の弟子八百人の中に。未名といふ忘人あり。これは利養に貪着して。もろ／＼の經を讀むといへども。忘るゝ所多しとなり。評曰すくひあけかづきあけ。ひまなく魚を喰ふときは。罪もむくひも後の世も。忘れはてゝおもしろやとはいづれ。
○唐人桐文といふもの。通辭の男に問ふていはく。貴國にも忘年といふ事をするや。通辭の曰いかにもすなり。桐文又問ふいかなる心をもて年を忘るゝといふや。通辭答へて。此國は忠をもて專とし孝又これに次ぐ。君の御年のかたふかせ給ふを常にいたみおもふ故に。せめては酒呑てそのいたみを忘れんとなり。親あるもの又その心也といへば桐文聞て。我國もむかしはさる心成けらし。今は世の中のせまりたるに。うき一年を忘れはべらはやとてぞ。忘年會はすなりといふ。評曰評なし。
○狐が女と化て入り來りしを。それとしりぬれば。物喰はせなとし。さらぬ顔に物語どもして。明日の夜又來よといひて歸しけるに。又來たり。今夜もさのごとくしてかへしはへるに夜每に來て物くひける。さてみるに後は容のみ化て顔は化ず。その後は手脚も化ず。それより後は所／＼すこしづゝ化て來たりける。評曰馴ては忘るゝならひならん。
○或人問ふて曰。酒を忘憂の物とは何をもていへりといふ人答へていはく。酒を呑めば憂を忘るゝ故也。又問ふ醒てもしかるか。人爰において答へなし。或醉人評曰。なにとて又呑なりとは答へずや。
○ある人忙然とはいかなる事をか申なりと問ひければ。或人いはく忙然としたる事をいふ也と敎へけり。問へる人いかにもと思ひて歸り。さておもひ出てみるにうち忘れて。何とやらんおもしろく敎へ給ひしがと思ひかへすにおもひ出ざりければ。又ゆきて忙然の事は何とかをしへ給ひしと問ひければ。忙然とは忙然としたる事をいふ也といひければ。いかさま忙然たる事にてさむらふとて。歸りて又々忘れにけり。評曰二人ながら忙然たり。
○難波に椀久といふ男ありし。是は唯一ッの事のみおぼえける。

○茗荷（みやうが）といふ物を多く食へば。物忘れするといふ。或旅籠やの亭主旅人に是なん多くくはせけるに。朝とくゆくをみれば。よく我物をうち荷ひていにけり。後におもへば宿錢を忘れていにけるなり。評曰此亭主も多くくひつらむにこそ。

○白き鼠を飼ひしに。よく馴れてはべりしが。黒き鼠に鼻をくはれて後は。彼の馴し人を忘れにけり。

○右近が人とちぎりけるに。男ちぎりを忘れたりければ。

　忘らるゝ身をば思はずちかひてし
　　人の命の惜くもあるかな

評曰實深し

○惟喬親王御櫛おろし給ひて。日吉の山の麓にこもりおはしぬるに。雪踏わけて業平の朝臣參りたまひて。

　忘れつゝ夢かとぞおもふ思ひきや
　　雪ふみわけて君を見んとは

評曰。古今集の古本に。忘れつゝとあるをみれば。てはの詞おほいにくだれり。

○物忘るゝ人二人をまねきて。物よく調へて饗應しけるに。ひとりの男鼻の水いたくたりたるに。今ひとりに紙一枚たまへといふ。その男ふところを探りて。此方も忘れつといふに。あるしみかねて紙二枚を出してやりける。扨くひ終りて歸らず。夜にいたりたるに猶かへらず。時は三時あまり過ぬれど。夜食のまうけせざりしかば。湯漬に漿を添て出しければ。二人の男うち腹立て。まねき給へばこそ。晝よりは參りてあれ。是はあまりに略したる御饗應かなといひのゝしりける。

○ある樵山にゆきしに。鹿の射られたるがはしり來て。まのあたりにたふれて死ぬ。そのまゝ土をうがちて。鹿をかくし。蕉をうちかけて。人見まじくしおきけるに。終に打忘れて家に歸りける。その夜の夢にさる事を見けりさめておもひ出ければ。彼しおきたりし山にいきてみるに。他の人見つけてとりければあらず。彼樵さは夢なりしかといふ。

○しばし乞食に落たりし人親にすくはれて。世に出て後かたりぬ。さりし間は物のきたなげ成しといふ事は忘れをりき。今かくなりては。又その心を忘るゝなりと。評曰冬又かたびらをきんや。

○むかし世捨人ありしに。死の時今にも來らん事をおそれすこしもやすくあらんやとて。つくはひてのみ居しとぞ。むかし又人ありて曰。人何ぞ死なんや。唯世のむつかし

き事はうち忘れよ。又我心のまゝにふるまふべし。是を不老不死の薬といふ。評曰はじめの世捨人はおぼえ過たる也。後の人は忘れ過たる也。

○山に籠り居る翁。たま／＼世に交ふときは。唯何事も忘るゝぞよきといふ事を。をり／＼くちずさみけるに。人悪がりける。或とき人のもとにやどり居て。朝陰に山へ帰るとて。いと暑きころ成りしかば。笠なん忘れ置つるとて。立帰りしを。亭主せし人唯何事も忘るゝぞよきとくちずさみければ。翁とりあへず。とはいへどあつきに笠はわすれめや。とつぎけるに打笑ひてとり出してやりける。扨後此事を友だちに語りければ。さはなぞ其儘にはかへしぬる。なにとて。さらば忘れは物によりてか。といひかへさゞりしかと責ければ。是は我愚なりしとおもひわびてをりけるに。いと寒きころ又翁の来りて宿りけるを。扨さいつ頃さらば忘れは物によりてかと。いひかへさざりしいとくちをしかりつるといふに。翁何のいらへもせで。此度は十日あまり遊ひをりけるに。あるじうるさくおもひて。山の庵は雪にや埋れうせなん。といひければ翁。

　忘るゝはこれぞよろしき雪もしらて

といひ出しければ。あるじ

　居るぞにくけれ忘れがほして。といひつゝ今は追ひ出しけり。評曰今の隠者おほくは忘れ顔也。

○鳥狩するを見るに。餌をまけるうへに黐をば物の枝に引かけて待居れば。鳥まづ始の程は空を忘れずして飛めぐり。しばしして空を忘れて高枝にとまり。又しばしあるに高枝を忘れて下枝にとまり。さてあるあひだに下枝を忘れて地に下り。地を忘れて黐にかゝる。物がたき老人評曰。つゝしむべし。

明和九年辰正月

（京）御幸町通佛光寺上ル丁　吉野屋七兵衛
同所　梅村宗五郎
堀川通高辻上ル丁　浅井庄右衛門
梓行

節婦傳

全

本書の著者は匿名であるが、山岡明阿彌の傳記中に、和文三大淫書の一たる『逸著聞集』と同じく明阿彌の戲作なりと斷言してある、それが事實らしい、夜鷹が傾城を罵るのを要旨としたもので、風來山人平賀源内の著『阿千代の傳』中にも「入江町に居さんしたお跖様（せきさん）跖婦傳の惣嫁なりが三浦屋の高尾様にいはんした通り……」と賛意を表して居る、今も寶暦版の粋書として珍重され、原本は容易に手に入らない附錄の『色說』はお跖の秘著として勿体を附けてあるが、明阿彌の賣女色道觀であらう

原本は上中下の三卷で、上卷の初めに色說序を入れてあるが、此複製には後の色說の前に移して置く

跖婦人傳序

水の清灑なる塞でながれざる時は孑孑を生じ五穀の生をやしなふ饐(すえ)て食する時は脾胃を損ずすでにあんばいをうしなつて飴を糞にぬり付る思ふに無體ならずや傾城流をうしなつて山猫を生じ地色味を損じて御赤飯組(おこはぐみ)となる凡物々長ずれば必ず方圖なしいにしへの色たる者二ツ今の色たるもの數十に及べり僧形の酒者あり賣物の地女ありいゝつべし下流に居て上に反する徒なりと予が友泥郎子也爲レ人瓢輕にして普く此道に通習せり上は揚屋の雪に映じ下は笘船の螢にて良し俳々憤々たる事すでに年あり且せき婦が六章を一覽せしより忽ち龍の雲に乘じ大晦日に金を拾し如く臂をはり鼻を微駈つかせて一旦豁然として色道の閫底をうちぬきたり終に跖婦を推し貴んで風情を江口の下にあらずとし是が爲に傳をあらはし來つて予に見せしむ予是を熟覽していはく天まさに跖婦を以て拍子木とせんとす我もまた子が爲に序せんか泥子完爾として笑て曰く善哉々々此書の全意これをもつて見つべき而已

寛延二年孟冬既望　杯物郎書

距歸必像

四十振袖好
相見惹客頻
交情總若醴
希女獨醒人

茅子題



夫造物者の功用たるや。千態万象にして。其變化も又きはまりなし。南枝北枝の梅の開落。既にことなるを見るにも非情すら猶かくのごとし。況んや人倫においてをや。好惡貧富は。則天の命ずる處にして。人力の施す處にぁらす。下恵盗跖が兄弟の如くなるを以てかんが見るべし。是等はずんど上代の事にして。しかも見ぬ唐人の寢言なれば。嘘かもしらず。いつの比にか色と欲との堺町に。仕切り場を勤めし男ありけり。坪皿のそこはかとなき。仕凝博奕の。どうも動かぬ身となりて。小見せ物のいゝ立と。變じて見ても。川太郎の尻がつまらず。七化のばけしまひが。終に二人の娘を賣喰にして。果は虎落の角めだちて。忽闇雲にうち乗て。何くの空へか逐電しけり。誠に鐵鉋の玉と。人の行衛は。しらぬものにて。妹むすめは。新町の三浦へ買れて。高尾に仕はれ。青柳といへる格子女郎と成て。嬌なる名を。揚屋町にかゝやかせり。生質利口にして坐鋭なく位あつて。やはらかで。古手買にみせても。孔雀絞りの。立ものとはしられたり。夫に引替て。姉娘は。すこし。食粒の過し生れにて。おなじ流れのうきふしながら。ひよんな處へ。入江町の夜鷹と成て。川竹にはあらず。うき材木のかげに。功勞へて。三十振袖の。洒者とはなりぬ。青柳は我身の。全盛につれて。ぁねの事をおもひ出せば。おなじ勤のういが中にも。我は錦繍のあたゝかなるにくるまり。名木のけふりにまみれて。金銀はいやしき物と。手にさへふれず。萬づ雲上にのみ。くらすを思へば。大名の御姫樣も。我身の果報も。只毛の三筋。たらぬばかりなるべし。夫に引かへ。姉樣のくるしみ。寒風に素布子きて。犬の産所を見る樣な。菰張に床入して。露霜をしのぎ。漸くぶつかけに腹をふさげば。はや夜鷹蕎麥の。浮名を立られ。嘸やくるしかるべし。其上夜鷹に。ぁね有と。沙汰ありては。公界する身の。恥なれば。兎角此里へ引取り。せめては河岸か伏見町の勤めでも。今の苦しみ外聞には。遙に勝るべしと。前〱より。度〱いへども。本より氣強き生れつきなれば。我がいふ分では。中〱聞入給ふまじ。とかく。姉女郎衆をたのみて。とくと合點の。有樣にいふてもらひ。すかしたり。恥しめたり。どふがなして。得心させましたく。此あら増を。高尾に咄せば。高尾も聞より。成程。尤なるねがひなり。手前の口から。いなものなれど。おれも高尾といふて。其名高く。此道の惣大夫となり。幼少より世界の。粋の中に。もまれて。諸譯手管の仕かけ迄。一ッ

として。くらからず。自恣な。客衆口利の末社。無理な口説に出合ても。ついぞ一度の不覺をとらず。おぬしの前では遠慮なれども。陸場所へも。往とゞかぬ。姉御の口先。どのやうにもいゝくるめて。其日から此里へ。勤たいといはんす樣にして。見せませふ。もし此事をいひふせずば。おれも高尾じや。二度此さとへ。かへらぬ法もあれど。花車な口から廣言はなつて。いつぞの序をまちゐたり。折節幸と。深川の開帳まいりに事よせて。妹女郎の山路をも引つれ。三人連にて會所より。樓船にのりて。はやくては。目だつもいやなり。晝の間は二間茶屋にあそび。かへりかけに尋ぬべしと。なにがそれ者の寄合。此三人が口を揃へて言廻さば。いかなる天魔。鬼神なりとも。黑雲より。猪牙にのらせ。鐵杖をも。質屋へやらすべし。まして。夜多嫁の。五人や三人。わが粋方の。いたつた咄しをしてきかさば。いか程我強き姉御なりとも。忽ち。賤しき心をひるがへし。夜鷹の苦患をすくふべしと。自慢たら〳〵。夕しほの。暮かゝる時分洲崎より。船をかへし。材木がしを見わたせば。今そ夜見せの出じほなりけりと。三人は船より上り。いづれもかぶろを。左右に引連。やり手若いものに。かしづかれ。八文字の道中。ゆたかにねり出せば。光りか

ゝやく生無の瑇瑁は。いまだ月あらざるに。なんのかげぞ。蹴出しにひらめく緋縮緬は。時ならざるに。なんの紅葉ぞと。目をおどろかせり。青柳は先へかけぬけ。あねを呼出して。立ながらつもる事ども。そこ〳〵に咄しぬ。扨姉女郎衆。今日開帳參りの序に。御前に御目にかゝりたいとて。跡からこゝへ御ざんすが。ちよとあふて。私が御世話になる。禮をもいふて。下んせといふにぞ。あねははや。合點して。慥に是は妹にたのまれて。吉原へ藏がへのすゝめにきたので有べしと。ひとりのみ込み。成程御目にかゝらふ程に。つれましてきやといへば。青柳は悅で。二人の姉女郎を案内すれば。あねのせきはすこしもさはがず。通〳〵と丸太にこしをかけながら。件の藿席を左にかゝへ。喰殘りのけんどん茶椀を右の手にかいこんで。すこしもうてたる色目なく。高尾山路を目八分に見くだし。是は〳〵御二人の衆よふこそ御ざんした。青柳が何やらかやら。いかいお世話になるげに御ざんす。隨分かあいがつてやつてくだんせと鰾なき言葉に。高尾は仕すましたりと會釋して。アイさよふで御ざんす。それは〳〵青柳どのがいたい氣にしてくだんすれば。眞實信の兄弟とおもひまして。何のかのと勤のうさをもかたり合まして。きついちからに成ます。

夫に付てもぬし様の事を。青柳が不斷いはれますはどふぞして。おなじ廓につとめたい。互の樂しみにもなる事ぢやと。私等までがおもひます。申すのもどふやらしけれど。廓といへば。色里のつかさなり、きこえもよく。人々の信保しだいで。座しき持にも。たて物にも。ついならるゝが勤の手柄。今の御勤の艱難は。嘸〳〵苦勞でも御ざんせう。其上御前の御器量なら。縱ひ大夫にならんしても恥しからず。先第一に。ひとうてなく。はりが強くて功者もあり。粹な客ほどうけ取座配。幾度床入さんしても。大義にもおもはんせねば。床第一の屋形衆にもしごくよく。功者が有て床がよければ。本に鬼に鐵棒。はやらしやんするは。たしかにわたしがうけ合ます。おり〳〵御こゝろのはなへぬけるも。兵四郎風のめりやすには。どふもいはれますまいし。是ほどの御身をもつて。今の勤をさゝんすのは。玉を泥にすてるとやら。さりとては惜ひ事。御前を女郎に仕て見たいと。そろ〳〵と勸めかゝれば。せきは聞より色を變じ。いかりの鼻聲耳にひゞきて。コレ高尾どの。皆まできくに及びませぬ。それは粹を虛氣(こけ)にするといふ言まはし。咄のやうな事ながら。毎夜壹貫五六百は。端目(はめ)なしに。賣こなす此せきでごんすぞへ。其樣なしらだ〳〵しい。直魯意(ちよろい)くるめで。今時の人が。かゝるものでは御ざんせぬ。白化の今の世の中に中〳〵二人の衆のやうな。青ひ事ではいけませぬ。夫も道理。わづか三町四方たらずの廓のうちで。客衆の五人や拾人や。取りさばかんす心で。わたしらをくるめさんすは。ほんに天水桶の孑孑とやらん。大門の外の事しらぬ。目狹き衆の口からは。慮外で御ざんせう。わたしらが勤といふは。こな樣がたの二月分程の客衆は。夜食前に勤ます。そふして色も情も粹も家幕もしりもさんせぬ心で。いやしいやうにおもはんせうが。湯殿雪隱とりあつめて。百疊たらずの揚屋のざしきで。土藏の間から狹ひ空を見て。くらさんすつもりでは。そふ心えさんすも尤なり。幸の事なれば。眞實の色道。わたしらが遊びを。はなしてきかせませふ。文盲なこなた衆が。功學の爲にもさんすがよい。まづこなさんがたのつとめといふは。波にうかへる水鳥同前。よそ目から打見には。悠〳〵と情も色も。あるやうに見ゆるけれども。下から見れば。內證は釣合だらけで。其水搔のせはしなさ。八寒八熱の苦しみ。盛衰は猫の眼とひとしく。丸くなり長くなり。賴み切たる客衆の氣がそれ。當にしておく無心がはづれて。いきつしんづの苦しみ。其樣に衣部(そべ)〳〵と。着かざつていさんしても。明日は質屋の

藏をふさぎ。わが着物に損料出して。かりぎのかなしさ。麁相な客衆の酒盛には。今や上は着へあびせらるゝかと。火の粉を防ぐ取廻し。寢相の惡ひ客衆が枕失せば。蒲團のよごれに夜の目もねられす。赤飯臭き禿を見れば。胸の動氣にひつしと應へ。元日より大晦日まで。月に華に二百日程は馬の籠ぬけする樣に。伸ッ屈んづ其苦しさ。何の隙にか情をしり。色といふ道をわきまへさんせう。指爪起請の苦痛。茶屋揚屋への付ヶ屆ヶ。連衆末社への心づかひ。そふじやとて。着ずにもゐられず。やらずには猶濟されぬ身の上にて。然も我物とては。錢が拾文楊枝が一本。さらになし。皆客衆の懷を當にする境界。これがなんと正直で。情をたてゝくらさるべき。心は山賣同然に。どふがなして括り付ヶねば。たちまち借金の地ごくに落て。赤恥をかきのれんの住居となる。呵責の苦しみ。大夫の格子のと。位があがつて全盛する程。物入が多くなり。もの入もおほひに隨て。欲が出來れば。追詰メは手工だへ落て。かうすれば客衆がのぼる。どふいゝかけれは退引させぬと。明ても暮ても。仕かけを工夫し。果は十露盤ぜんさくに成て。色も情もとり失ひ。粹でも杭でもなく成しは。當時御まへがたの身の上なり。中〳〵わたしらが仲間には、その樣なひ

れつなるさもしき欲氣はさら〳〵なし。色を賣り情を見がきて。意氣地を以て第一とす。そも〳〵夜鷹の遊びといふは。誠に色道の眞をつねとし。欲をはなれ賤しき事なし。天をつり夜着とし。地を三ッ蒲團とす。月影を以て燭臺とすれば。あかりの屆かぬ所もなく。しんをきる世話もなし川風に床をあふがせ。夕立に打水させ。八百八町の河岸通り。みな私しらが次の間とおもつてゐれば。百萬人の一座でも。ついぞつかへた事がござんせぬ。物日なく身揚りなく天地破れねば。寢道具疊の表がへにも氣づかひなく。引込禿も持たざれば。客衆をたのむ物入なし。床でくるめる間がなければ。客衆をたらす僞をしらず。飢へし奴子が心に任せ。ふるといふわがまゝなく。橫にゆくべき卑劣もなく。心中の間夫狂ひのといふやうな。鼻毛の長ひ客衆がなければ。此挨拶に氣ぼねも折ず。廿四文で廿四文が情をかくれば。口說といふ樣な家暮らしい沙汰もなし。いやなればこず。すけばくる。客にうそなく。此方に手工多なし。只眞實信の心にして。少しもかざる僞なし。僞なきより誠なるはなく。かざらぬより正直なるはなし。此の正直なる心を以て。男と女のまじはりすれば。こゝが色道の根元にして。ちと洒落才ことながら。陰陽自然の色道なり。此色





道を以てたのしむ時は。客衆に勘當心中の難儀なく。女郎に自前借金の辛勞なし。もへ出るもと詠ぜし妓王が操。心とむなとおもひやりし江口の風情も。おのづからわきまふべし。女郎に苦しみなく。客にたのしみあり。わが色道の玄々微妙なり。おまへがたのほめそやさんす粋達は。椀久様をはじめ。藤伊様紀文様を先としていづれも盡して見さんしたれど、是ぞ此衆の流義といふしるしもなく。添通した女郎もなし。只時の張合にて金つかはんしたばかり。いはゞ是等も青ひから。あたら身上を皆にさんした。是といふもみな女郎によくあるゆへ。金銀でせり上げ客衆を流浪させましたり。辻立や狂氣にならんすもこな様がたのやうな衆が。立物がほしして全盛するゆへ。惜哉。名曳。素女。檜垣。といへる君たちの。流れを汲べき女郎もなく。色道の風情はすたり果て。手近くいへば欲と虚との二ッかためたこなた衆と。かざらずむさぼらぬ此方の意氣かたとは。大鵬と土龍ほどのちがひなり。またも片腹いたき事には。色も情も胡椒丸のみの女郎衆。わが身のねむたい腹たちか扨は前方なる客衆をふり付て。是を一廉張と心え。ちと花(はやり)時出すやいなや。無性によきかとおもひ。饐目(すへめ)なもの前には俄の床がけ。このいやしさ。さもしさ。不洒な女郎の勤を捨て。高尾さまも夜鷹がましなり。山路様も妹も諸ともにわたしが弟子にならんせと。一言もなくいゝふせられ。二人の女郎は天窓も上らず。膽をとられて暮正月を頼みし客の。俄に國へたつたるおもひ。取はづしたるあしたのごとく。忙然としてたつもたゝれず。うろ〳〵するをよふ〳〵やり手に助られて船へ迯込み、初て黄なる息をつきぬ

泥郎が曰。我はじめ此章をえて。其言を信ず。後三浦の遣手が咄しを聞て。其行を見る。爰におゐて。おもへらく。象も。吾髪筋を以て。繋ぐ事をしる。鯰をも吾瓢を以て。押へる事を得べし。蝮蝎に至ては。是を釣べき餌をしらず。彼は是。婦中の蝮蝎也。老子曰。虎も其爪を措處なし。生姜酢でもいけずとは。誠に。せきふがいゝなる哉

里雀曰大坂夕霧は座頭に一度の情あり江戸元祖奥州は中町にて一文錢をいたゞきたり是等は諸客の美稱をする處なれともみな一に意氣地にして大道をいふにたらず一代男の世之助が女護の島渡り椀久が小判の豆まきもみな浮世の沙汰也粋過れば虚なり虚なければおぼれやすし青樓ありてよりせき婦が如きはいまだあらず

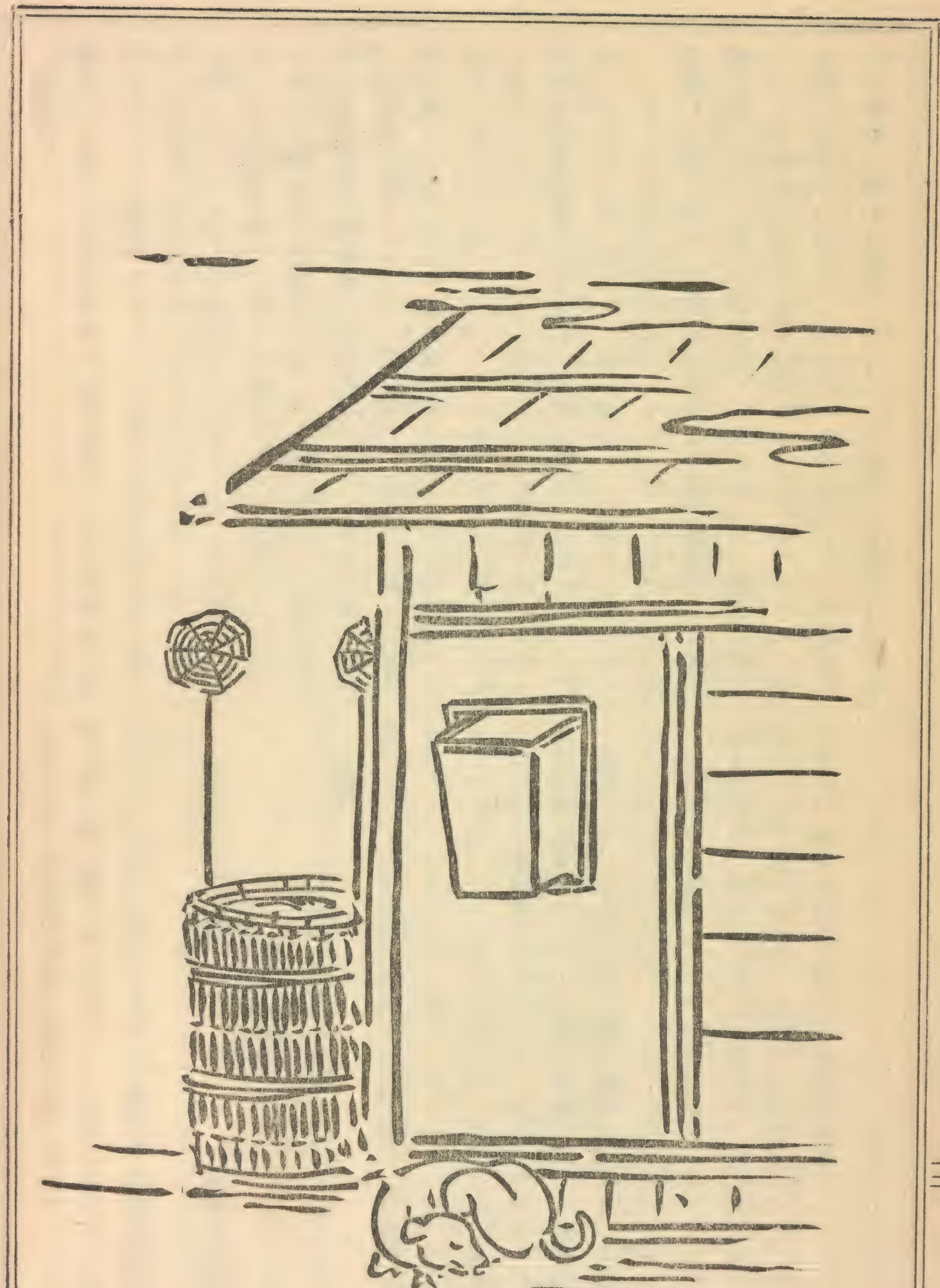
色說序

龍も穴に住では土龍の店をかり鯉も淺みに出ては目高と鼻をひとしうす此書やむかし〳〵入江の婦人せきが顯す處にして色道玄々の至極を述たり既に紙屑籠に投じて老鼠のしとねにならんとせしを例の道人傳をあらはし文を編して漸く二三が六章を得たり至れる哉盡せるかな葭簀がこひの切り賣して寂光淨土の揚屋を見くだし釣り髭したる奴子を相手に眞實自然の情を悟る文は辻番のいやしきより出て理は火の見櫓の高きよりたかし河岸端のいぶせきに居て二階座鋪の尊きに通ず何れ一流正統の粹人なり是は高慢の鼻かけ地藏の化身たる事うたがひなからん抑全盛は大夫の德にして廓中の本尊なれど春宵一刻のたのしみ難波の事のよきも惡鋪も吸蔓の花のから名にしたがふなるべし勢ひつきては蛸も足をすぼめて蛇となり鱣が發心して山の芋となるかもしらずされば黃金の肌とはいふならん思ふに身は中流の船と等しく常に帆あしをかけつはづしつ客の機嫌をとり梶面梶おせども〳〵或は地色の風にそらされまたは密夫の波にしづんで彼岸に漕付る事は桃源のおもひに等しかるべし跖は實に老君子の肺肝にいり江口の君の流れをくんで眞實不二の妙處に至れり婕妤も口をつぐみ式部もゆびをくはえるの才あらずんは誰か此理を發明し何ぞ此章のこゝろはせを知ん醉て考へ醒ておもひよく〳〵此書を熟讀して大門にいたらん人は此道の聖域にいるべし嗚呼かの闕文見まほしきことを

寬延ふたつの秋　　風鈴丈人漫書

色說序

余つねに。彼せき女の高風を悅ぶ。故に。其事蹟をたづねまほしく。一日入江町に到て。問もとむるに。名を隱し跡をうづんで。さらに知れる人なし。是に依而。是を見れば江口は誠に普賢菩薩の化現なり。跖もまた察するに。鼻欠地藏の權化なるべし。入江町を去時に臨で。名染の辻番が一夜留メて。二八の上にて無理處望せしより。止事を得ず終に十六章の色言を著して去ぬ。惜哉十章は雨漏にくされしを。後に辻番がために。蚊帳の釣手によりこまれて失ぬ殘る六章は。番屋の壁中より出たり。故に闕文ありといへども。誠に玄々の方言。萬世の色則と言つべし。時に九月十三夜。梅溝の貧客泥郞。於鐘撞堂書焉





泥郎章句

色說

粋の章　第一

粋の粋とすべき物は。つねの物にあらず。實の實とすべき物は。常の實にあらず。諸客皆。粋の粋たる事をしるは。不粋なり。故に大粋は粋ならず。是を以て粋なり。不粋は能粋なり。爰を以て粋ならず。粋人絶ざれは。色道さかんならず。血文をやめ。起請を捨て。女郎に實あり

色の章　第二

色道すたれて。物日あり。間夫出來て。仇ぼれあり。大盡ふもてにして。くるめ有。內證昏亂して。心中あり。故に貧は客の常。心中は女郎のおとろへなり

手巧多の章　第三

數百の手くだは。床の一悦にしかず。此一悦に至て。粋もなく家暮もなし。其無によつて。無量の極意あり

第四章
第五章
第六章

各闕たり

遊の章　第七

能あそぶ客は。もてるにこゝろなし。能樂しむ客は。面白きに心なし。もてるに心なく。おもしろきに心なき時は。何處にあそぶとしてか。もてざらん。何れの女に逢としてか。面白からざらん

第八章
第九章
第十章

各闕たり

大盡の章　第十一

粋をやめ知恵をすつれば。遊の利百倍なり。せいを絶。もてを離れて。女郎眞實にかへり。間夫をせかず。口說をせねば。女郎に僞なし。大盡いたりを失つて。粋に落。粋を失て。手くだにおち。手巧多を失て。指爪あり。指爪は。女郎の難義にして大盡無手金の初なり

間夫の章　第十二
女郎身の上の章　第十三
意氣張の章　第十四
大皷の章　第十五

右三章條目有て闕文

古のよく太皷をもつ物は。大盡を利口にせんことを欲せず愚にせむとす。遊の續きがたきは粋になるを以て也。粋に

なりてあそぶは。遊の下品にして樂しみのつきかゝりたるなり。且那おろかに末社たはけにして。遊樂長久なり

第十六章　闕たり

評

泥子曰。椀久物狂と成て曰。やぶれば。ぐわちもなかりける。葛城むけんの鐘をつくとき。やぼならこふした。うきめはせまじ。此言やうやく大道をしるに似たり。窮して正にかへる惜哉。屁放て。尻をすぼめたること。又曰。四代目の高雄曰。粋じや〳〵といへど。來ぬが粋なりといへり此言大道に似たる異端なり。これ斷無にして。せき婦人が不昧因果にそむけり

浮世の是非。彼我は。萬事塞翁が馬なりと。古風の洒落者の諺にして。誠は萬古不易の金言なり。凡木の曲れるものは。木挽町に鋸の難をのがれ。鵜の聲よき物は。瀬戸物町に鍋の害をまぬかれぬ。よつておもへは善は不善にして。不善は善とやいはん。とかく犬猿の寄合。蠻氏。融氏の角めだちたる有さま社まことに水懸論なるべし。鼻凹の見にくきをわらへば。闇の夜に要心よしと悦び。聾の不自由なるをおかしめば。雷の聞へぬ德ありといゝしは。ある肝煎姥の骨稽なり。彼が鼻欠ヶにならん事かたく。是がつんぼにならん事かたかるべし。只虚靈にして谷心中に座せんこそ。我儘の妙所ならん。爰に一日石原社にあそんで。一竹簡を得たり。これせき婦人が言の葉にして。鳥の跡たらず傳へて六章あり。惜哉。その全書見る事不能。今猶のこれる所を察觀するに。至玄神妙。皇々としてその奥をえず。默々然として。翫味し。しばらくして悱々焉たり。やゝあつて夭々乎たり。反復するに。嬉々抃々として。仰で嘆じ俯しておもふ。眞に其辭簡にして。無聲無臭の妙所にいたり。卷ときは懐にかくすべく。のぶる時は四海にあふれつべし。其化のおよぶ所。野夫飛で粋にいたり。眞御侍たちまち戀の淵にはまる。彌高く彌堅し。惘として座をわすれ己をわする。眞に後世のたま物也。是が爲に事を好むの雅英子。せき婦が事蹟をつらねて一卷として。其遺章の後にしるせる處。綱領細目南華老子の腸にわけ入。猶其上に出たり。心術を論する。きもなますのふとひ献立に。伯夷叔齊が。蕨とつて餓死だ偏屈より。比干。子胥が無分別。尾生が。ばか律義。いづれも犬死の取沙汰。人間わづか。百年たらぬ命。そのうちにも死だの生たの。頭痛疝氣の事ま

で。十露盤にあてゝ見れば。口明イてわらふ日は。漸く一月に四五日なり。夫に八百萬年もいきる氣に成て。名利につかわるゝは。いかいたわけ。大厦千間なるも。夜臥八尺にすぎずと。一口みそにいゝこめたる。神色容貌、歴然とみるやうなる文勢。勇辯遺文。卓然として句々金玉の聲あり。これがしりえにつたなき辭をそえん事。印殿に煉珊瑚樹の。とりあはせにひとしく。見る人のそしりわらひ草となるかも。きかぬが極樂と。そら嘯いで。是も志意をよろかばしめ。命をやしなうのみちなりと。隨意の荷擔人して放言なほやまず。王濟杜預が類にはあらで。これ又筆癖のしかするところなり

寬延巳巳歲長月下浣　　葛飾守株窓

寶曆三癸酉正月吉日

東武書肆　萬屋彥八
川村善六
大阪屋秀八

大正十三年十一月末日印刷
大正十三年十二月一日發行

（此中にあり）二　定價金貳圓

不許複製

東京市下谷區上野櫻木町二十二番地
編輯兼發行者　（宮武）外骨

印刷者　東京市本郷區動坂町三一七　明正舍　小國直太郎

東京市下谷區上野櫻木町二十二番地
發行所　半狂堂
電話下谷六五九〇番
振替東京三九四二〇番